新體詩歌集

全

新雅堂方錄

新體詩

文學博士　外山正一

實に光陰は箭の如し。想へば早や。殆ど十五年の昔なり。矢田部井上の二氏と共に。我れ新體詩抄を著ししは。世の人は兎角新奇に愕くが恒なり。未だ見慣れぬ體裁の詩とて。詩にも非らず歌にも非らずと難ぜぬは稀なりき。中にも國學者流の如きは。雅俗和漢打雜ぜての用語。是れはと呆るゝ計りなりけり。斯る者をば詩抔とは。言語に絶えたるととせり。去り乍ら。此の時よりして。我こそは眞の新體詩とも云ひ得べき者を。作り出さめとの望念を起しし人々も出來しなり。新聞紙に雜誌に。伎倆を試みむとする者を往々見受くるに至れり。中には國學の心得ある者もあり。餅屋は餅屋。其の用語は流石に風雅を極はめ。修辭自から平穏にして句調のよきものから。同臭味の人の爲めには。

新體詩も大いに改良したり抔と。持映さるゝも尠なからず。去り乍ら。此の者流の作は。新體詩と云はむよりは。寧。俊基朝臣東下りの亞流と云はむ方適當ならめ。眞に改良新體詩とも云ひ得べき者は。未だ幾許もあらざるならむ。其れも其の筈。作者の數の多からざりしは。是れ世に需要のなかりしが故なりしか。斯る方便を以て。思想感情を發表するの必要を感ぜし人の尠なかりし故なりしか。然るに。昨年より今年に掛けて。新體詩及び其の一族なる軍歌の作者は。頓に其の數を增加したり。日清戰爭の爲めに大いに需要起りしが故なり。殊に軍歌に於て然りとす。抑も本邦に於ける今の軍歌の嚆矢は。十四年前に予の作りし「拔刀隊」の歌にして。又本邦に於ける第二の軍歌は。其の後久からずして是も予の作りし「來れや來れ」の歌なりしなり。當時は勿論。其

の後と雖も。物識顏の人々は押しなべて。軍歌抔とは本邦には用ひ無き者と思ひしが如し。然るに。十四年の後なる今日に至り。天下一般に軍歌の必要を認むるの時節は到來せり。實に。文部大臣は。學校生徒に軍歌を課すべき事を訓令せられたり。世の中の事は實に面白きものにぞある。

今日世に行はるゝ新體詩には。主として二樣あるが加し。一は「峯の嵐か松風か」流。若しくは俊基朝臣東下りの類にして。一は新體詩抄に習へるものなり。二者の果して世人の嗜好に合ふ故か。但しは作者に智惠の無き故か。兎に角。更に一層新體なる者を見るは至て稀なり。然れども。此の二者を以ては未だ滿足すべきにあらざるなり。茲に於て。明治十年代に新體詩を創始せる者は。明治二十年代に亦新體詩を創始するの特權ある者と自認し。數年前

より又一種の新體詩を試作するとを勉めたり。本書に載する所は即ち斯の如きものなり。而して。是等新體詩に關して特に辯じ置くべき事あり。體形の新奇なるが爲めに。詩にも非らず歌にも非らずと爲す輩。世に尠なからざるが如し。如何樣。普通の考を以て見れば。或は然らむ。然れども。是れ少しも予の意に介する所に非らず。予は只々予の目的を達せむと欲する者なり。予が斯の如き新體を用ふるは他の故あるにあらず。予の思想予の感情を。感情的に語らむ爲めの方便と爲すものなり。七五若しく五七の調は。抵抗力少なく平穩に。輕々と舌の動く爲めに便利なるも。種々變化ある思想及び情緒は。到底斯る一定窮屈なる體形を以て常に適當に云ひ表はし得べきに非らず。却て種々變化ある體形を使用するこそ適當なるべけれ。人はいさ知らず。少なくとも予は。

七五或は五七の調を變化なく使用するを以て。感情的口演の方便に合ひたるものと爲さず。

予の新躰詩に彼此批評を加へむとする者は。予の如何に之を口演するかを先づ預め知るを要す。「畫題」「忘れがたみ」「吊詞」「可兒大尉」「我は喇叭手なり」等は既に口演せしとある者なり。其の折々に清聽を賜はりし人々の。眞面目なる批評を蒙らむ事は。予の切に願ふ所なり。最も値價ある批評と思へばなり。

明治十五年に於ては。軍歌は特り予の作りし所なりしなり。然るに。明治二十八年に於ては。軍歌は貴賤之を作り。萬民其の必要を認むるに至りしなり。

洋風畫術の本邦に行はるゝは數十年の昔よりの事なり。然れども。其の畫工の採用する畫題は。數年前までは職として。景色建築

若くは法外なる想像等に止まりしなり。是に於て。予は明治廿三年に。將來大いに採擇すべきは人事的畫題なるとを唱へたり。而して。今日は大いに。此の種の畫題を採擇するの傾向あるに至りしなり。

近年予の作れる朗讀體若しくは口演體新體詩を以て。詩にも非らず歌にも非らず抔として排斥せむとする族。世に尠なからざるが如し。然れども。予が創始せる此の新詩形たる。將來大いに行はるべき者なるとは。予の爰に預言する所なり。

新體歌の長短句

中邨秋香

上古の歌に、句の長短さだまりなきは、事にふれ、時に臨みて、おもふまゝをやがてたゞちに歌へるよりにて、後世のごとく詞をいたはり、思をこらして作れるものにあらざればなり。そはかの雄略天皇の豐樂の宴に、采女を打伏せまし〳〵、頸を切らんとせさせ給ひしをり、それがうたへる、又葛城山の御獵に、舍人を刑せんとせさせ給ひし時、かれがよめる、などもても明かにしらるゝかおもふまゝを、たゞちにうたふものなれば、其時の情はやがて其語勢と語氣とによりて、くまなくあらはれ、長短不紀律なるところ、中々に深く人の心を感ぜしめけんかし。

その〻ち耀歌會など、やう〳〵盛になりもてゆくにしたがひ、短歌長歌の體わかるゝにつれて、長歌も五七の句調の、口に唱へてなだらかなるより、おのづからそのかたさまになりこしものなるべく。げに五七、または七五の句調は、なだらかにして、口にいとよくあふものなれど、なだらかなるからに。ゆるやかにてせまら

ず、靜にてなごめるなどの、情景にはよくかなへど、するどくいかめしく、烈しくあわたゞしきが如きさまを、十分いひあらはさんには、なほ長短句によるには志かず。

但し古人は大かた五七の句調にて何事をもよくいひのべたり、されば今のよといへども、五七の調もていはれざる事やあらん、といふ人もあるべけれど、そはいまだくはしく思はぬよりの論なり。おほよそ古人の情のおほらかにしてゆたかなりしは、今のよの人のかけても思ひ及ばれぬことにて、そは言葉をつひやすまでもなく、かの采女が頸に刀をうけ、舍人が刑にのぞみて歌へる歌の、從容としてせまらざる一ッによりても、あきらかにおもひしらるべく。志かおほらかにせまらぬ情よりうたひいづるものなるからに、古人の情は五七の句にても、何事によらずよくう

たひ得られしなり。されば擬古體のけやけきうへより、情をもやかて古人に擬へて作りいでんには、今の世にても五七もて大かたはいひ得べしといへども、もし明治今日の情景を、さながら歌ひて十分いひあらはさんとには、字音は更なり、或は洋語をよみ入るゝこともあるべく、かたがた長短句にあらざれは、縱横自在の情をば盡すべからず。

そも〳〵新體とはこれまでなき躰といふ名ならずや、志かこれまでなき體を立つるにいたれるは、これまでである體にては、今日の情をばいひあらはしがたきによれる事なれば、たとへいかなる句法、いかなる詞ならんも、歌の體を失はざらん限りは、採り用ひて、意を盡さんことをこそはかるべけれ。殊に長短句は、今新に作り設くるものにはあらで、前にいへるが如く、上世はやく例あ

る事なるをや。あはれわが歌垣の人々よ、何を憚りてか長短句の再興をば、はからざる、何を厭ひてか、心のかぎりを盡すべき調によりてはうたはざる。

新體詩歌集序

この頃外山博士一書を與へらる。披き見れば「いにし明治の十五年に、矢田部井上の兩君とはかりて、新體詩抄と稱ふ書を出版せしが、こたびまた新體詩歌集を出版せばやと思ひ、中村上田の二君をそゝのかしゝに、共に承諾せられたり。貴所にもこの列に加はりねかし」とあり。予は固より迂濶の一吟人なれども、亦今を重んじ新を貴ぶ情なきにあらねば、もし予にしてなし得べきことならば、驥尾に附かむと答へてその作例を乞ひけるに、博士即ち

可兒大尉の什を似されたり。再三再四玩味してその意匠には深く感服しつれども、およそ詩歌とは吟哦すべきものゝ限をいふ名と思ひたるに、博士のこの作はいかなるさまにうたふものなるか、不審に堪へざりければ、築土に到りてまのあたり之を質しゝに、博士ねんごろに解き聽かせられたり。こゝに於きてこの種の篇は、詩歌といはむよりは寧かたりものにして、わが國大古の壽詞、近古の謠曲のたぐひなることをさとりぬ。さて退きてさま〳〵考へし後こはひとつ學びて見むとの心おこりぬ。そのゆゑはかの古體の長歌の如き古はいさ知らず。近き代となりてはそのうたふべき法は更に知ると能はず。短歌は講頌の式など昔よりの傳はあれど、所謂萬篇一律なるに似たり。唱歌のふしは面白けれど、一々音樂家の作曲を乞はざればうたひあげがたし。され

ば自身作文して自身詠誦するに容易なるは、この博士が主張せらるゝ一種の語りものこそよなからめと思ふがゆゑなりけり。すなはちこの體に倣ひてかゝる事をも作りみん。さるふしをも言ひ試みんと思ひわたるほど、「上田君の稿は既に來たり。中村君の作ははや着きたり。誰は云々したり。彼はかくかくあり」との、博士よりの報頻りなれば、いと靜心なくて十分の工夫をめぐらすに及ばず。纔に二三をあらたに作りて、他は舊稿をいさゝか改め、以て驥尾にと約せし責を塞ぐことゝなりぬ。

明治二十八年七月二十六日　樅の屋主人　阪正臣

新體詩歌集

目次

我は喇叭手なり　文學博士　外山正一　頁一
桶峽　中邨秋香　四
侍從入道　阪正臣　五
ねがひ　上田萬年　八
亡き人の墓　同　九
苔香　阪正臣　十一
兒島高德　中邨秋香　十二
佐久間玄蕃　文學博士　外山正一　十三
船上山　阪正臣　十五
燕　中邨秋香　十六

七歳にて身退りける甥の不羈を　上田萬年　十七
まなひ　同　十八
神　同　十八
月と花と　同　十九
郭公　文學博士　外山正一　十九
某孃の一周忌に　阪正臣　二十
都歸雁　中邨秋香　二十二
時　上田萬年　二十三
勅語捧讀　阪正臣　二十三
忘るゝな此日を　文學博士　外山正一　二十四
暮色　中邨秋香　三十三
往け往け日本男兒　文學博士　外山正一　三十四

我が海軍　文學博士　外山正一　三十七
卒業生を祝ふ　阪正臣　三十九
忘れがたみ　文學博士　外山正一　四十一
進め矢玉　中邨秋香　六十五
梅　阪正臣　六十六
おも影　上田萬年　六十七
旅順の英雄可兒大尉　文學博士　外山正一　六十九
かな〳〵　阪正臣　八十
伊東中將　中邨秋香　八十二
丁汝昌　同　八十二
學者　上田萬年　八十三
花　同　八十三

與謝野氏を送る序　阪正臣　八十四
親睦會　中邨秋香　八十五
春の夜　上田萬年　八十六
夏の夜　同　八十七
飲め〳〵〳〵　同　八十七
大阪人の一事業おこさんとするを　阪正臣　八十八
畫題　文學博士　外山正一　八十九
春朝　中邨秋香　九十五
音樂　上田萬年　九十六
オイテルベ日を　同　九十六
君仁民忠の國　阪正臣　九十七
迷へる母　文學博士　外山正一　百六

見渡すかぎり　中邨秋香　百八
偶感　上田萬年　百十二
二葉の薫　阪正臣　百十二
元始祭　中邨秋香　百十五
吉野懷古　同　百十五
深き迷　上田萬年　百十六
言擧　阪正臣　百十六
福嶋中佐　中邨秋香　百十九
戀　上田萬年　百二十一
吊詞　文學博士　外山正一　百二十三
親友　中邨秋香　百二十六
さうびと墓　上田萬年　百二十七

熱海の二十六夜待　中郵秋香　百二十八
櫻井　阪正臣　百三十
山中雜興　中郵秋香　百三十一
古城　同　百三十一
山茶花　上田萬年　百三十三
御苑觀菊　同　百三十四
歸化　阪正臣　百三十五
銀婚式　中郵秋香　百三十七
百合　上田萬年　百三十八
明治廿八年一月一日を迎へてうたふ歌　中郵秋香　百三十九
新年　阪正臣　百四十一
ミニヨシ　上田萬年　百四十二

霜夜の鐘　中郵秋香　百四十三
死にむかひて　上田萬年　百四十四
招魂社　阪正臣　百四十五
歳暮感懷　中郵秋香　百四十六
輸卒　文學博士　外山正一　百四十六
ひとこと　上田萬年　百五十二
問答　同　百五十三
成歡のたゝかひ　阪正臣　百五十四
皇國の旗　中郵秋香　百五十六

新體詩歌集目次終

新體詩歌集

我は喇叭手なり

文學博士　外山正一

劍を振るの士官。銃を發つの士卒。是れぞ勇ましき軍人なり。

堅門を破る者。鐵壁を攀づる者。誰か其の勇を稱せざらん。

或は單騎敵陣に近寄りて。親しく偵察の任務を盡し。味方に大勝を得しむる者あり。

或は暗夜に乘じて敵艦に近寄り。水雷を發して之を轟沈せしむる者あり。

壯絶快絶と天下皆唱ふ。

爰に。軍人にして其の任劍を振るに非らず。彈を放つに非らざる者あり。之を喇叭手とす。

陣中に戰場に。朝にも夕にも。進擊に退却に。唯々に喇叭を吹く而

已なり。是れぞ即ち喇叭手なり。（繋り結び、テニチハ等は、舊來の法則に拘泥せず、以下これに準へ）

彈丸右に落ち。彈丸左に落ち。彈丸前に落ち。彈丸後に落つるも。喇叭手は之を顧るに遑あらざるなり。

白刃首に臨むも。彈丸身に中るも。泰然自若。將官の命に應じて喇叭を吹くの外。彼は爲す事を知らざる者なり。味方の勝敗彼に關する尠なからざればなり。

然れども。大軍を破るも堅城を落すも。誰か之を喇叭手の功なりと云はむ。

岡山縣人白神源次郎。彼は亦一個の喇叭手なりしなり。

人は云へり。彼は唯々喇叭吹きなりと。

彼は云へり。我は唯々喇叭吹きなりと。

成歡の役。彼は進軍の喇叭を奏す。我軍猛進。砲聲既に交る。忽ち飛

來る一丸彼の胸部を貫く。

鮮血淋漓後に撞と倒れたり。然れども喇叭を放たず。喨々と吹き續けしなり。

實にや。白神は喇叭手なりしなり。彼が吹きし喇叭の音は。高く天涯に屆きしなり。廣く萬國に達せしなり。

然れども。我軍凱旋の時に際しては。彼の靈の緒と共に。既に絶ゆる所となりしなり。之を聞かむと欲するも。最早聞く事能はざりしなり。

然れども。成歡の役。白神が吹きし進軍喇叭の音は。四千萬同胞の耳には。今も明に聞ゆるなり。

白神は唯々喇叭手なりしなり。白神は唯々喇叭手なりしなり。喇叭手の最期は。實に斯の如くなりしなり。（明治廿八年四月作）

桶峽

中邨秋香

轟くいかづち、篠つく雨。あやめもわかぬ、闇の夜を、神のたすけと、
岨つたひ。轡を包み、草摺巻きて。攻入る必死の、三千騎。
沓懸、大高、笠寺の。野にも山にも、滿ちみちたる。四萬五千の、駿河の
軍勢。明日は清洲を、攻落し。決河破竹の、いきほひにて。尾張の國を、
定めんと。心驕の、酒宴。
松の嵐は、琴のまらべ。鳴神のおとは、鼓のひゞき。よに心地よき、ゆ
ふべやと。佩きつる太刀の緒、打解けて歌ひつまひつ、興も夜も。い
とたけなはなる、折しもあれ。
四面に起る、鬨の聲。スハ夜討ぞと、いはせもあへず。雨よりまさげき、
寄手の鎗先。嵐を吹暴く、敵の太刀風。
天たちまち覆り、地みる〳〵 裂け。きらめく稻妻、光のひまに。貳千

餘人の、玉の緒は。草葉の露と、消えにけり。
あゝ定めなき、人のよや。賴まれぬ、人の身や。さもいかめしく、轟き
し。名はたゞ夜はの、はたゝがみ。夢の名殘の、松風も。昔のあとや、た
づぬらん。五月雨寒き、桶はざま。

侍從入道

阪　正臣

予は都に住居する小川の侍從入道蓮如なり。いたましや。新院は、
御心からとは申しながら、讃岐國志度の皷が岡に流され給ひ、御
座所は築垣きびしく四方に回りて、只一つあきたる口より、日に
三度の供御參らする外には、物奏す者とても無しとかや。
予むかし陪從にて、御神樂のついでなどに幽に見參申しゝことも有り。今幸に世すて人の身にもあれば、彼地へ立越え一言の御

慰めをだに奏し參らせんと思ふ也。

笈を脊にし杖を手にし、山を踰え海を渡り、さしも遙けく思ひつる讃岐の國へも着きにけり。なに〳〵新院のおまし所は是なりとや。聞及びたるよりも一層いぶせげなる黑木の御殿、昔の御榮華に引替へて目も當てられぬ御有樣よな。御門内へは入るなとや。さても荒らかなる護衛の武士の制詞かな。さらば力無し内より人の出よかし。一片の丹心を人傳にだにあらはし申さん。

日ハはや西に沈みたり。月はすでに東に昇りたり。澄み渡る今宵の心を、手なれし笛に託せて、よもすがらふきや明さまし。さらぬだに旅のならひ物のあはれいと深きに、元は一天萬乘の大君とまし〳〵ま御身の上、かはれはかはる世の末とて、かくあ

さましき御すまひし給ふを、まのあたりに見參らせ、今昔の感に堪へ難く、精神をこめて吹く笛の聲曉に徹したり。

御門の内より黑みたる水干袴着たる人の、出たるを幸と後にま たがひ入りて見れば、御庭は草葉の生ひまげり、人腸を斷つ風情なり。涙に咽びつゝかの人を以てことの由を奏上けたりけり。

まばしまてかの人出たり。うれしや謁を賜ふかと、おもふにたがひ、常々戀しく思食す都の人殊に昔御覽じつる者にてさへあれば、即御前へも召されたくはおぼしめせども、問ふにつらさも思出ぬべし。又かゝるかたちを見られんことも愧かしと御諚有りて、御涙にくれさせ給ふと傳ふ。

げに〳〵是は御ことわり也。さらばこの一首をだに奏し給へよ。朝倉や木の丸殿に入りながら君に知られで歸る悲しさ。

あら勿體なや御かへしを賜ふとや。朝くらやたゞいたづらにかへすにもつりするあまのねをのみぞなく。嗚呼かゝる悲しき事こそなけれさりながら、これわが生涯の寶なりと宸筆を笈の中に納め、ふしをがみてなく〳〵都へ立歸る。

ねがひ

上田萬年

あなたの空に往かまほし
海原とほく船出して
はしき吾が背とたゞ二人
涙路をわれらの世界にて
涙路は如何に荒くとも

はやては如何にあれぬとも
君をおきては命とも
山とも頼まむ人やある
沈まば沈め涙の底
すがる此身を見たまはゞ

泡と消ゆとも世の中に
思ひはあらじと知りまさむ

あれしあらしもをさまりて
月さへ澄める涙の上に
影も並びてやすらはゞ
いかに嬉しきことならむ
ふたりの影の外にまた

涙に浮かべるもののもなく
來し方ゆく末かたらはゞ
如何に嬉しきことならむ
あなたの空に往かまほし
海原とほく船出して
はしき吾が脊とたゞ二人
涙路をわれらの世界にて

亡き人の墓

同

たのみし事も仇なりき
契りし人も夢なりき

はかなきものは君にして
つれなきものはわが命

たゞかりそめの一ことに
親はらからもよそにして
榮耀榮花もかへりみず
われには君ぞ身も捨てし

われを遺して君ひとり
この世さりぬと聞きし時
契りも頼みもすまじきは
人なりけりと悟りてき

されども思へばいと嬉し
君はなさけの深くして
操もきよき人なりと
大方びとにもめでられき

今は十歳を外國に
學びをさめて君がため
得たる智識もかひぞなき
愛なき智識は惡魔なり
いたくもあれし此の墓よ

葎に垣も見えぬなり
法師はおのがつとむべき
つとめもよそに何かする

悲しき秋の風は吹く
枯野に虫も啣つなり
待てよさびしき苔の下
われも長くは世に住まじ

苔香

阪　正臣

おもしろや山陰の庭一面の苔筵　春雨にも夕立にも村雨
にも時雨にも　緑の色をいやまして

二節

箒執り下立ちて　松の落葉を掻拂ひ　筧の水すくひあげて
飛石に打灌げば　苔の香深く薫る也

兒島高德

中邨秋香

紅葉は散りぬ、時雨は晴れぬ。さしてはるゝ、たどりこし。甲斐こそなけれ、笠置山。

小徑を取りて、分け入れば。船坂の麓、霧空しく迷ひ。雲を凌ぎて、よぢ登れば。杉坂の高嶺、風いたづらに吹く。

いでましどころ、夜や更くる。蛙の外は、聲もなく。花の下蔭、風絶えて。朧月夜の、影くらし。

あな朽惜しや、かきくらし。ふる五月雨の、ためならで。篝火消ゆる、峯の堂。あな勇ましや、五月闇。子を呼ぶ鶴の、一聲に。やがて明けゆく、隈山峠。

一生の苦節、千劔破を凌ぎて、神かつ驚き。二世の精忠、湊川を衝きて、天地をたゞよはす。

あゝ其の櫻に留めつる、言葉の花は、敷島の。日本ごゝろの、眞十鏡。朝日に光を、競ひつゝ。千歳の今も、香にこそ匂へ。

佐久間玄蕃

文學博士　外山正一

忠臣は二君に事えず。貞女は兩夫にまみえず。友の敵は又我が敵。我を知り賴みし人亡びたり。今は早や何をか願はむ。大國を宛て行ふと云はるゝも。動かざるは信義の爲め。佐久間玄蕃は斯くぞある。

人は何故に自殺をする。或は悲に堪へずして。或は恐るゝ所の爲めに。自害を爲すは婦女子のことなり。世の爲め人の爲めには格別。呵責の難を怖れての、自殺は武士の慚る所。佐久間玄蕃の心な

り。

武運つたなくして敗を取り。敵の俘となりし者。首を刎ねられ死するのは。誰しも知れる理の當然。何を恐れて人目を避けむ。上下を着て繩に掛り。都の中をば引廻はされむ。佐久間玄蕃の願なり。

花の都を車に乘り。引廻はさるゝは千萬の。人に觀られむ爲めと知れ。見る者の眼を愕かし。乳母に抱かるゝ稚兒も。永く語れや我が事を。はでな衣裳を着かざりて。佐久間玄蕃の所望なり。

鬼神の恐るゝ勇あるも。敵對ふ者は斯くなりと。我に繩掛けて引廻はし。普く天下に威光を示さば。誰ありて之を見乍ら。怖れぬ者は世にあるまじ。誰か天下を爭はむ。佐久間玄蕃の寸志なり。

憐を乞うて何にかせむ。自ら切腹したればとて。何んぞ名譽になるべきぞ。一言半句も未練は云はじ。敵の思ふ存分に。法に任せて我を切れ。繩打掛けて首をば刎ねよ。佐久間玄藩は男なり。（明治廿四年八月作）

船上山

阪　正臣

危かりける隱岐の海
霧さへ深く立渡り
海士の釣舟うき沈み
いかになりゆく此身かと
大御心そみたれける」
級戸の神や守りけん
秋のたのみの八束穂の
稻津の浦に着きにけり」

あたりに響く名和の君
迎へ奉りて棹も無く
御寺の奥を九重の
寄る白浪をせきかへし
やゝ吹き起る時つ風
都にまたも還ります
こゝろよげにぞ見えにける

かたしけなしと取敢へず
楫もたのまぬ船の上
天つ朝廷になずらへて
立つ仇浪をうちくだき
追手の風に眞帆あげて
御供つかへしそのさまは
樂しげにこそ見えにけれ

燕

中邨秋香

霞める空に、友よびかはし。
翅も輕く、とぶつばくらめ。
馴れにし去年の、軒端やかはる。

古巣たづねて、こゝかしこ。
あはれ其つばくらめ。

其二

誰がかけにける、印の糸ぞ。
おもひの色も、さながらなるを。
結びし人は、行方も知らず。
をちかへりつゝ、わびしらに。
あはれそのつばくらめ。

七歳にて身退りける甥の不羈を

上田萬年

先立つもなほ樂はあり
遺れるもなほ苦はまとふ

つひに行くべき道なれば
罪えぬほどや易かりし

まなび　同

學べばわれも塵となる
神こそ今はたふとけれ
學べばわれも神となる
塵こそ今はいとしけれ

神　同

宇宙に神はなきものを
ありと思へる人をかし
心に神はましますを
さらですませる人あはれ

月と花と　同

月花のつくり出でたる心かな
月も花もやがて我身の心かな
月と花と共にこの世の心かな
月も花も心も一つ佛かな

郭公　文學博士　外山正一

勇ましや郭公
小さなる身體にて
限りなき大ほ空を
獨り自由に翔り行く

勇ましや郭公
かよわなる翼にて
下の世界を省みず
雲居の内に翔り行く

勇ましや郭公
葦より細きのどなるに
勇ましや雲居の内になく鳥は
身は死しぬとも名こそ殘らめ（明治廿四年六月作）

テッペン迄となく聲は
幾百萬の人も聞く

某孃の一周忌に

阪山　正臣

この朝けおりたち見れば、
わが庭の木の葉色づき
わが園の萩が花散る　み山には今か鳴くらん
さを鹿の戴く角の　束の間も忘れかねつゝ
眞悲みわが思ふ君　可惜みわが思ふ君の
射干玉の黄泉路をさして　いでましゝ月はこの月
すぎましゝ日は今日なりき　今日といへばまして慕ばる

今日といへば殊に歎かる
さま〴〵の學のれくか　現身といましゝ時は
眞つぶさに學び明め　國々の人の言語
挿花も點茶の道も　絲竹の遊びのわざも
志貴島の大和詞の　ことゞにたどり給ひて
山の井の淺きさとりの　林さへ分け給はんと
やゝ〳〵に進みましゝを　われにしも質し給ひて
いつしかも重りましけん　かりそめの風のこゝちの
夜霧なす消えましゝより　朝露のひるまも待たず
二かへり秋はかへれど　一めぐり年はめぐれど
みすがたは二たび見えず　花の如にほひし君が
み車はまたとめぐらず　玉の如よそひし君が
いたづらにたのぶが岡の

おくつきの朝露深く
そこ故に木の葉色づき
くれなゐの涙ぞおつる

夜霧のみたちこそ渡れ
萩が花ちる秋毎に
衣手のうへに

中邨秋香

都歸雁

結びもはてぬ故郷の夢のゆくへも、かつ霞む花の都の、おぼろよ。」
雲路遙に、鳴きつれて。おくれ先立ち、歸る雁金。あはれ、このなつかしき。朧月夜に、心うつさで。雪のふる巣に、急ぐかりがね。
あゝ此雁金を、いかに見るらん。こと立てゝ、都に出でし、益荒男の。
朝に上野の花にうかれ。夕べは隅田の、月に歌ひて。故郷は、なにはの春とうたゝねの、夢路にさへも。ゆきゝたえにし、あゝ其益荒男のとも。此雁金をあはれ、このかりがねを。

時

上田萬年

久しくよそに過ごしつる
花の面影かへりきて
わが打ち見ればおのづから
うつろひてけりあなあはれ

勅語捧讀

阪正臣

一節

千代田の宮に千代かけて
くだし給へるみことのり
よるへき道はこゝに在り

二節

世をきろしめす大君の
万の民のよろつ代に
ゆくへき道はこゝに在り

ひとりの君をいたゞきて　ふたりの親をかしつきて
いもせはらから友がきも　睦びあひつゝみ教に
そむかぬまことあらはさん　たかはぬまことあらはさん

三節

水穂の國に生れ來て　大御寶の名を得つゝ
御代を守らん吾黨の　道のまるべのみことのり
仰きて讀まん朝夕に　ふして思はん夜晝に

文學博士　外山　正一

忘るゝな此の日を

忘るゝな此の日を。記臆せよ此の日を。
明治廿八年五月十三日は。苟も大日本帝國の人民たる者は。子々孫々千載の後までも。決して忘るべからざるの日なり。

明治廿八年五月十三日は如何なる日なるぞ。明治廿八年四月十七日下の關にて調印せし。媾和條約の公布せられたる日なり。
明治廿八年五月十三日は如何なる日なるぞ。下の關媾和條約に附屬する地圖を以て。清國が我に割讓せし遼東半島の地域を始めて公布せられたるの日なり。
明治廿八年五月十三日は如何なる日なるぞ。大日本帝國が。亞細亞大陸の如何なる部分を得しかを知りし日にして。亦之を失へる事を知りし日なり。
明治廿八年五月十三日は如何なる日なるぞ。下の關媾和條約は。我が　天皇陛下が。大御心に適し間然する所なしと曰はせられしものなるとを　陛下の四千萬の臣民が。畏みて知り奉りしの日なり。

明治廿八年五月十三日は如何なる日なるぞ。下の關媾和條約は。我が英聖文武なる　天皇陛下が。大御心に適し。間然する所なしとせらるゝに拘はらず。友邦の忠言を容れ給ひて。半島地域還附の事を。特に政府に命じ給ひし事を。　陛下の四千萬の臣民が。畏みて知り奉りしの日なり。

明治廿八年五月十三日は如何なる日なるぞ。平壤に。黃海に。旅順に蓋平に比類無き働きを爲して戰死せる陸海軍人の爲めに。四千萬の同胞が殊に哀悼の念を起したるの日なり。

明治廿八年五月十三日は如何なる日なるぞ。我が忠勇なる陸海軍人の力に因て。常に勝者の位置に立ちたる神洲四千萬の人民をして。忽地一大敗北を爲したるの感あらしめたるの日なり。

明治廿八年五月十三日は如何なる日なるぞ。帝國四千萬の人民

の爲めには。最も愉快なる日にてあるべかりしに。却て恰も君父の柩を送りて往くが如き感あらしめし日なり。

明治廿八年五月十三日は如何なる日なるぞ。帝國四千萬の人民の爲めには。最も憂ふべき。最も悲むべきの日なりしなり。而して又。明治廿八年五月十三日は。帝國四千萬の人民に。最も大なる恩惠を與へたるの日なりしなり。

明治廿八年五月十三日は如何なる日なるぞ。帝國四千萬の人民の爲めには。實に救濟日とも云ふべきの日なり。明治廿八年五月十三日は。我邦人民の生活に一大革新を起したるの日なり。帝國四千萬の人民をして。私心を去り。私怨を忘れて。同心協力偏に奉國盡忠の覺悟を以て。日夜黽勉事に努めむとするの決心を致さしめたるは。實に明治廿八年五月十三日の出來事なり。

明治廿八年五月十三日は。英聖文武なる　天皇陛下が。帝國陸海軍人に勅諭を賜ひて。「隊伍ニ在ルモノト散ジテ鄕關ニ歸ルモノトニ論ナク五事ヲ服膺シテ軍人ノ本分ヲ恪守シ一誠以テ他日ノ報効ヲ期セヨ」と最嚴に曰ひし日にぞありける。

某々政府の我に對する友誼は實に厚しと云ふべきなり。忠勇なる我が軍人の血を以て買ひ得たる遼東半島。清國政府が甘んじて我に割讓したる遼東半島は。某々友國の忠言の爲めに。我は之を清國に還附すべきに至りしと雖も。某々友國は是が報として更に數倍の價値ある寶を。我に惜氣もなく惠與したる恩者なり。」我邦四千萬の人民に。古來未曾有の意識を授けたるは。即ち彼等友誼國の賜物なり。我邦四千萬の人民に。古來未曾有の奮發心を起さしめたるは。即ち彼等友誼國の賜物なり。我邦四千萬の人民

に。古來未曾有の忠義心を懷かしめたるは。即ち彼等友誼國の賜物なり。

一度忠勇を以て取り得たる物は。又忠勇を以て取り得ると難きに非らざるならむ。然れども。明治二十八年に於て。斯の如き一大精神を我が四千萬の人民に加へむとは。決して何人も預想する能はざりしならむ。而して能く之を我に加へたるは。實に某々友國の恩賜なり。

清國との媾和整ひ。再び平和恢復の後に於て。我邦人の爲めに最も恐るべき者は。復讎を企てむとする清國に非らず。新强國の勃興を嫉妬せむとする西洋諸國に非らず。日清戰爭の意外に上首尾なりし爲めに。我邦人の慢心得々たらむとするの傾向なりしなり。

清國との媾和は既に整ひたり。平和は再び恢復せられたり。而して。四千萬の同胞中。誰か慢心得々たる、某々友邦の恩は實に大なりと云ふべきなり。

日清戰爭の結果として。切齒扼腕慷慨戒心日夜奮勵國力の發達を是れ圖らむ者は。敗者たる清國の人民ならむとは。何人も預想せし所なりしが。何んぞ圖らむ。其の位置に立つ者は。却て勝者たる我々日本人なるに至れり。某々友國の恩は實に大なりと云ふべきなり。

鋤鍬を執るの農夫も。重荷を背負ふの役夫も。絲を紡り機を織るの賤の女も。槌を打ち草鞋を作るの老夫も。石板を抱へて學校へ通ふ兒童も。明治二十八年五月十日の詔勅は。未來永劫片時も忘るゝ能はざる所ならむ。

頃者某街の路傍に人の群を爲すあり。近寄りて之を觀れば。山の如くに重荷を積みたる荷車の前に傾きて停まるあり。之を挽き來れる馬は地上に倒れ。重き車の轅の爲めに敷き据ゑられて動く能はず。馬方は馬をして立たしめむと欲して頻りに促せども。馬は唯々悶躁く而已なり。轅の爲めに壓せられたるの馬は到底起ると能はず。然れども。馬方は惡き馬ぞと苛立てり。警官來りて此の有樣を見。馬方を制せむとしたり。馬力は聞かざる者の如く。忿怒に任せて益々手荒に馬を責むめとしたり。

憫むべし。立つと能はざりしは馬の罪には非らざりしなり。誰か馬方の振舞を惡まざらむ。

此の日。此の處を過ぎて南方數歩に在る一橋を渡りし者は。橋の彼方に又人の山を爲すを見しならむ。而して。群中には又一人の

警官ありて。一賤夫をして。地上に棄て在りたる一塊の物を取り上げ之に纏へる襤褸を徐に取り剝さしめたり。群れる人々は果して如何なる物をか見しぞ。生れて未だ幾許にも成らざる乳哺子の死骸にぞありける。群衆の眼に遮りしは。辜無き顏。雪の膚。弱なる手足なりしなり。何人も惻隱の心の起らざりしはあらざるならむ。棄てられし者何の因果ぞ。棄てし者如何なる鬼ぞ。此の小兒。犯せる罪とては如何なととてよもやあらざりしならむ。非道の世なり。無慙の世なり。前には無辜なる畜生の虐待に苦むあり。今は無辜なる小兒の路傍に棄てられしあり。然れども。彼の馬彼の小兒。彼等は果して無辜なりしか。犯せる罪とては果して一も在らざりしか。彼等は共に。弱者と稱する最大最惡の罪者にてありしなり。畜生

なるも人類なるも。斯の如きは即ち弱者の境界なり。弱者たる勿れ弱者たる勿れ。（明治廿八年五月作）

暮色

中邨秋香

聞ゆる、鐘の音。
煙こめつゝ、ほの〳〵暮れゆく、黃昏。
雲路分けて、歸る村鳥。
五つ、四つ、二つ、遠近に。

其　二

空ゆく、浮雲。
つひのよすがは、眺むる袂の、夕露。
星の光、今ぞきらめくや。

一つ、三つ、七つ、こゝかしこ。

往け往け日本男兒

文學博士　外山正一

一

往け往け日本男子　千歳の一遇ぞ
開闢の昔より　鍛へたる我の腕
試すは今の時　失ふな此機會
神の敵人の敵　うち殺せこの腕で
起て丈夫往け丈夫　往け往け天下に周く
武勇をしめせ

二

知らざる歟我敵は　大惡の人非人

大國とこれ誇り　小國をこれ侵す
野蠻をばこれ極め　非道をばこれ盡す
不義の賊詐僞の賊　亡ぼせやほろぼせや
起て丈夫往けますらを　往け往け天下に周く
武勇をしめせ

三

惡むべし我敵の　惡虐は比類なし
辜なきを虐殺し　婦女子をば辱かしむ
汝には母なき歟　汝には妻なき歟
泣く姉妹なく子あり　其聲を聞かざる歟
起て丈夫往けますらを　往け往け天下に周く
武勇をしめせ

四

敵軍の兵卒は
彼は我母の敵
我姉妹女子の敵
敵軍の畜生に
起て丈夫往け丈夫

五

うちころせ大砲で
衝き崩せ劒をもて
東洋の文明を
撃て〳〵突け〳〵

強盜か豺狼か
彼は我妻の敵
神國の清き血を
穢さすることなかれ
往け往け天下に周く
武勇をしめせ

文明の大敵を
蠻族の巣窟を
進むるは我が力
君の爲め國の爲め

起て丈夫往け丈夫
往け往け天下に周く
武勇をしめせ

我が海軍

同

一

朝日に輝く日の丸の旗
千島の果より沖繩迄も
一度も今迄穢されざりし
敵の軍艦幾百あるも

二

亞細亞に又なき此島國に
幼き時より海には慣れて
我をば攻めんとする者あらば
閃く皇國の軍艦共よ
開闢この方異國の敵に
貴き海岸守れや守れ
千尋の底へと沈めてしまへ
天の惠で生れし者は
暴風も恐れず波にも怖ぢず
武勇を比べん怒濤の中に

敵の軍艦幾百あるも
千尋の底へと沈めて見せむ

三

風吹き浪立つ嵐の時も
妻子の爲には沖へと出でゝ
命を惜まぬ日本男兒
何ぞや恐れん敵の軍艦
涙をば枕に死ぬるも覺悟
君あり國あり又墳墓あり
敵の軍艦幾百あるも
千尋の底へと沈めて見せむ

四

弱き船にて大海渡り
異國の海岸荒して廻はり
鬼神なりと呼ばれし者は
大膽不敵の汝の祖先
彼より受けたる武勇を以て
天晴守れや我が神國を
敵の軍艦幾百あるも
千尋の底へと沈めて見せむ

五

水雷大砲甲鐵艦を
自由に扱ふ非凡の手練
皇國に仇なす敵のあらば
萬里を隔つる國なりとても
一々汝の力で懲らし
國旗の威嚴を天下に示せ
敵の軍艦幾百あるも
千尋の底へと沈めてまへ

卒業生をいはふ

阪　正臣

菅の根の長き月日を
いそしみし驗まさしく
まなばしら學の場に
ますらをの名をしたつべき
うつせみの世にうちいでゝ
天地は君らが爲に
時は來ぬ時は到りぬ」
日月は君らが爲に
ます〳〵も廣くやならん
千里の駒に鞭うち
いよ〳〵も明くや照らん
シベリヤの野にかも遊ぶ

小舟に櫂ひきをり
足は行かであらゆる書を
天の下の物ぢり人と
かにかくに羨しきは
春秋に富める人々
つら〳〵に思ひわたせば
眞砂なす數へもあへず
身をたてん道とも知らず
書よむもわが身ひとつを
さらぬをば慰み草と
あたらしき年の四十を
何事もいまだ得成さず

ムールの島にや渡る
まつぶさにあさり明らめ
ならんとや君らは思ふ」
おひ先のこもれる君ら
立返りわが身の昔
恥かしく悔しき事の
まなびには志しゝも
世わたりのすべとも思はず
守るべき敎とおもひ
はかなくも玩びつゝ
徒に過しやりつゝ
何の名もいまだ得立てず」

今の世のわか人たちは
世をわたるたづきもとめて
さればこそまなびも進め
大事もはやくなるらめ
こゝ思へは後の世人は
言ぞうべなる

若きより目あてを定め
學にも入りたつといふ
するわざもあだにはならね
美し名もやがて立つらめ
おそろしといひし聖の

忘れがたみ

風の音さへ聞えず。
いと靜かなる冬の夜の。
星月夜なるは何となく。
哀れなる心地せられけり。

文學博士　外山正一

夜の更け行くまゝに。
ゆき通ふ人も次第に途絶え。
庭に鳴く露の命の蟲の音は。
絶え〳〵にこそ聞えけれ。

丑三には尚ほ程あれども。
晝のかせぎに疲勞たる。
賤の身は手足を伸して。
はや熟睡せるも尠なからず。
明日の竈の細き烟は。

立や立たずと行燈の。
暗き影にて繰返し〳〵。
僅かなる賣溜の。
錢を算ふる夫婦の者あり。

乳呑子に乳房をはませ。
脊を叩きて寐かしつゝ。
子の行末を案じ煩らひ。
夜の更け行くも忘らざる親あり。

神に願かけ佛に祈り。
藥よ灸よと手に手を盡し。

我れは死すとも最愛の。
子の命をば助けんと。
心を碎きし甲斐もなく。
命數已に盡きしにや。
玉の緒の絶えて果敢なく。
消え失せし子のなきがらに。
抱き付きて今は早や。
此世に生くる甲斐もなしと。
よゝと啼き入る母親あり。
百年の後までも。
老いたる親に孝行盡し。

海より深き大恩に。
行末ながく報いんと。
誓ひしことも水の泡にて。
まだ萬分の一だにも。
盡さぬうちに親ハはや。
歸らぬ旅に門出したれば。
夢かと計り思へども。
偖あるべきにあらざれば。
泣く〳〵ゆくわんを爲し終り。
戀しき親のなきがらを。
今や柩に歛めんと。
氣を勵ませど若者は。

せきくる涙せきあへず。
只茫然として行(ガヽス)みたり。

蝶よ花よと掌(テ)の中の。
玉の如くに育てたる。
獨り娘の。明日(アス)は目出度き婚姻にて。
其喜びと支度のために。
家内は上を下への騒ぎ。
父母(チヽハヽ)は。疾くけふの夜の過ぎ去りて。
明日(アス)の來たるを待ち兼ぬるに。
恍惚(カボコ)子氣(ギ)の慚かしさにて。
何事をなせども更に手に付かず。

寐ても寐られぬ娘あり。
明日(アス)は主君の面前にて。
佞人原の惡事をあばき。
事宜によりては差違へ。
我れも共々相果てんと。
忠義の覺悟は金鐵にて。
只一心に君の爲めを。
思ふてねたばを合する武士あり。

實に人は果敢(カ)なきものなり。
今日(ケフ)の夜はまだ過ぎ去らざるに。

ひたすらに明日明後日のとにのみ。
兎角心を移しがちにて。
如何なる天の災が。
すぐ眼前に迫ればとて。
一寸先はやみの譬へ。
明日ともいはず今宵のうちに。
深き淵瀬に陥る身とは。
露志らずして百年の。
計をなすこそ哀れなれ。
風なく雨なく。いと静かなりし冬の夜は。
忽ちにして。奈落の底を見るに至れり。

泣く者も笑ふ者も。
喜ぶ者も怒れる者も。
舞ふ者も唄ふものも。
楽しむ者も悲しむ者も。
均しく一度に聞きたるは。
地底に聞えし大山の。
崩るゝ計りの響きなりけり。
すさまじき勢にて。
大地は下より突き上げられ。
地上はさながら激浪の。

打つが如くに震ひ動けり。

安政二年十月二日。

時刻は夜の亥の刻かとよ。

地裂け。天落るかと驚かれたり。

見る〳〵百萬の人家。

倉庫神社佛閣。

倒るゝあり崩るゝあり。

家に圧かれ瓦に打たれて。

死せるは幾許なるやを知らず。冬の夜は。

忽ちにして奈落の底を見るに至れり。

一時に落ち來る千萬の瓦。

一時に崩るゝ百萬の家の響は。

泣き叫ぶ老若男女の聲に和して。

譬ふるにものあらざりけり。

暫らくして。地の震ひ稍をさまり。

崩るゝ家の響薄らぐに隨ひ。

あとに殘りて聞えしは。

親を呼ぶ子の聲なり。

子を尋ぬる親の聲なりけり。

近くにも遠くにも。

殊に哀れに聞えしは。
次第〳〵に細くなる。
助けてくれ助けてくれの聲なりけり。
理りなる哉。
梁に壓さるゝ者あり。
柱に挾まるゝ者あり。
土に埋まるゝ者あり。
壁にまかるゝ者ありて。
さなきだに。苦しむ者は多かりしに。
地の震ひ動くこと。
未だ息むか止まざるに。

四方の天は一面に。
次第〳〵に明かるくなりて。
さながら晝の如くになりしは。
所々方々の潰れ家より。
火は炎々と燃え出し。
焔が天を焦がましなり。
家に潰されて身は動かず。
悶え苦しむ其所に。
燃え來る火の爲めに。
烟に咽び熱さに耐へかね。
遁れんとしてあせれども。

のがるゝとは叶はねば。
聲を限りに叫べども。
助けに來たる人はなく。
無間の地獄阿鼻の熱。
無慚といふも餘りありけり。

此夜僅かの時の間に。
死したる人の其數は。
幾萬なるかをしらざるが。
中にはいとも哀れなる。
死にざまの者も多かりけり。

運強くして不思議にも。
其身は萬死を遁れしも。
親兄弟の無慚の死を。
漫ろに悲しむ者もありけり。

枕を並べて臥し居たる。
夫婦にてありながら。
夫は梁に壓し潰ぶされしも。
妻は横の抜けたる爲めに。
下に陷り不思議にも。
命を助かりたるもあり。

梁にまかれし吾妻を。
助け出さんとあせれども。
力及ばざる其内に。
あたりは一面火になりて。
看す〳〵妻の燔死(ヤキシ)のを。
殘して去れる夫もあり。
妻子は如何なしつると。
崩れ家を。取除け見れば こは如何に。
妻は穴藏に半ば埋まり。
片手には稚子(ヲサナゴ)の足を抓み。
恨めし氣なる顏つきにて。

色青ざめて死せるもありたり。
左れば此夜の不運の者には。
或は祝ひの席に於て。
或は悲しみの最中に。
寐耳に水に死せるなど。
語るも哀れなる者ありしが。
是等は人の身の上なり。
我れにも此夜の話しあり。
父は此夜は宿直(トマリ)の番にて。
家を守り三人の。
子を護りしは母なりけるが。

上なる子二人は。
母の左右に寐ね。
末なるは乳母に抱れて。
枕邊に臥ゑ居たりき。
有るまじき事なれども。
すは地震よといふとひとしく。
乳母は抱きし子を捨てゝ。
我れのみ外へと逃げ出たり。
母は啼く子を抱きあげ。
右と左に寐たる子を。
ゆり起さんとあせりしかども。

稚子をかゝへし身にて。
大浪にゆらるゝ如く動きつゝ。
片手で起す左右の子は。
冬の夜の寐入りばなにて。
起せども〳〵。
いつかな〳〵起くればこそ。
幻にて母に連れられ。
外へ出でたる其時は。
地のゆるゝのもやみしあとにて。
四方の天は火事の爲めに。
既に眞赤になり居りたり。

實に危ふかりしは。
我々親子の命なりけり。
幸も安政の地震には。
水地なる舊家の。
潰れぬものは希なりしが。
我等が住ひしふる家も。
潰れぬ計りに傾きたりけり。
今に於て想ひ起すも。
身の毛のよだつは此夜のとなり。
此地震にて我等が家の。

もしや潰れもしたらんには。
我が兄弟は死したりとも。
誰をも恨むべきならねど。
もし母が死したらんには。
我等が罪にてありたるならん。
左りながら。此夜もし。
我等親子が死したるならば。
何故母が死せしかは。
世に知る人はなかりしならん。
生くべかりしを子の爲めに。
死せしなりとは誰か知るべき。

今も尙ほ忘れざるは。
久しき昔の此夜のことなり。
實に有難きものは母の愛なり。
母は其身の危ふきをも。
顧みずして一心に。
子を助けんと爲ましものなり。
實に深きは親の恩なり。
我れに今日あるは。
かゝる愛を以て育て吳れたる。
母ありたるが爲めなり。

我れは自ら(ミヅカ)ましらざれども。
我が母が此夜の如くに。
其身の命の危ふきをも。
顧みずして我々の。
身をば護りてくれたるは。
幾度なりしかまれざるならん。
此夜のことは亡き母の。
我れには忘れがたみなり。
此夜我々親子より。
運拙くして死せる者には。

助かるべきを子の故に。
死したる母は幾許なるらむ。

此夜のことは亡き母の。
我れには忘れがたみなり。
此夜の如き天災の。
もし今日の夜に起らんには。
助かる命を子の爲めに。
棄てんとするの母親は。
幾許なるかまれざるならん。
實に深きは親の恩なり。
忘れ難きは母の愛なり。（明治廿四年七月作）

進め矢玉

中邨秋香

進め矢玉の、雨の中。飛びこめ劒の、霜の上。
我が日本の、國の名を。世界に揚ぐるは、今日なるぞ。
血をもて色どれ、日の御旗。骨もて堅めよ、國の基。
必死をきはめし、つはものゝ。背にこそ凱歌は、負はるなれ。背
にこそ凱歌は、負はるなれ。
飛びこめ劒の、霜の上。進め矢玉の、雨の中。

其　二

來り接へよ、短兵戰。日本をのこの、手を見せん。
來り味へ、日本刀。水もたまらぬ、さま見せん。
これぞ義勇に、育ちたる。國の軍の、土産物。

徳の春風、暖かに。威の秋の霜、肌寒く。
我が日の本の、名と譽。普く諸國に、轟かせ。廣く世界に耀かせ。

梅

阪　正臣

降續きし長雨やう〳〵やみて、窓にさし入る日影のどかなり。
物むつかしかりし心さへはれわたりて、庭におりたてばえもいはずめでたき薫、風におくられたり。
待ちし心には猶豫ずして、梅のさきそめたることを知りぬ。
嬉しくて木のもとに立依るに、上枝中枝より下枝をかけてにほひわたるさまは、白玉の五百つ集かとうたがはれたり。
かの佐保姫と聞ゆる春の神も、桃よ櫻よと花はあまたなれど、まづこの花の白玉をこそ、頸玉手玉にとりゆらがすならめと思ふ

に、ゆかしさたゞならす。
つひに一朶折り來て花瓶に挿入れて親しう打見るに、あかぬ色香はとよみしもさることにて、又一きはのめでたさをそへたり。」之を見るにつけて思ひ出たるは、故郷の檐端なりけり。
さらでたに甚う荒れたりしを、住まずなりて後は、うゑおきし一株の梅の花のみぞ、春毎にむかしながらの香にゝほひ、かへらぬあるじを待ちわぶらん。
あはれすゞろにも物のかなしうおぼゆるかな。空はさばかり晴れたるものを、わが袂のみうちしめるは、これや身ひとつの春雨。

れ　も　影

上田　萬年

未だ御聲はきかねども　その面影は見奉りぬ

熱か光かあはれさに
打たれてわれも魂消えぬ

そのあはれさに魂消えて
われやむかしのわれならぬ
たゞ籠り居てゆく水に
今日はものかく身となりぬ

春ものの憂しひとり寢て
ねやの軒端の月見れば
上野隅田の花の空

人はたのしとぞ歌へども
かゝらざりせば母上と
あくがれましを野に山に
不孝の罪はゆるしませ
戀は心のもがさゆゑ

戀よつよきはいましなり
御國のためも子の道も
家の寶も身の耻も
いましが眼には塵なれば

旅順の英雄可兒大尉

文學博士　外山正一

開闢以來未だ曾て今日の如く國光の輝けるはなし。開闢以來未だ曾て今日の如く我邦人の名譽の高大なるはなし。良運なり幸福なり此の時期に遭遇せるの日本人(ニホンジン)は。然れども殊に良運幸福なるは海陸の軍人なり。古來幾多の戰爭に於けるが如く彼等は同胞人と戰ふ者には非らざるなり。

四百餘州と誇る世界無双の大國こそ彼等の敵なれ。而して國光斯の如く輝き邦人の名譽斯の如く揚がれるは抑も何者の力に由るか我に三拾倍の國土を有し我に拾倍するの人口ある敵と戰て連戰連勝陸に海に常に勝を制して我が神洲を泰山の康に置けるは實に軍人の忠勇に在り。

大軍を破り堅城を拔く者は云ふも更なり。不幸敵丸に中て戰死する者。其の名譽は亦國史と共に決して滅せざるなり。今の軍人たる者。其の憂ふる所は。特り出陣の命を受けざるにあり。

今の軍人たる者。其の願ふ所は。最も至難なる方面に向ふにあり。」平壤は實に無類の天險に。無量の人工を加へたるの要害にして。數年の籠城を期して敵軍の據れりし處なり。

然るに。第一軍は一擧此の堅城を攻落して。普く宇内に其の武威を振へり。

支那の北洋艦隊は。東洋隨一の强艦隊と誇稱せし者なりき。

然るに。我が海軍は海洋島の一戰に於て。支那海軍の戰鬪力を半は殄滅したり。

此の二捷の如きは。萬國をして日本帝國を以て。最强國の一なりと云はしむるに至らしめしものなり。

第一軍の名譽たり。我が海軍の名譽たり。之を稱せざるの人民なく。之を羨まざるの軍人はあらざりしなり。

是に於て。東洋第一の要害と聞えたる。旅順攻擊の命を受けし軍人は。實に愉快極はまりしと云ふべし。

旅順の略取は實に敵國咽喉の揸扼なり。

歐米人は堅唾を呑んで。我が軍人の手練如何にと待ち構へたり。」

上將官より下士卒に至るまで。苟も第二軍に屬する者は。誰あつて。其の任の廣大なるを知らざるはなかりしなり。

果せるかな。東洋第一の要害は。第二軍の一擧に由て見事に陷落せり。

實に日本帝國の名譽なり。我が軍人の面目何物か之に過ぎむ。各國の人民は唯々に驚愕するの外なかりしなり。旅順陷落の報至るや。至尊よりは優渥無二の勅語を賜はり。四千萬の同胞は上下の別なく此の大捷を祝せざるはなかりしなり。

旅順陷落の後に於ける二軍軍人の愉快は果して如何なりしぞ。忠義を盡せる者の愉快なりしなり。國恩に報いし者の愉快なりしなり。取る事能はずと人の言ひ合へりし要害を見事攻略せし者の愉快なりしなり。全世界の人に其の武勇を賞讃せらるゝ者の愉快なりしなり。

嗚呼快事なり。嗚呼壯事なり。愉快極はまりて人々手の舞ひ足の置き處を知らざりしなり。

戰死者は毫釐も憾む所なくして瞑目し。負傷者は如何なる痛苦をも感せざるの時なりしなり。

然るに此の快時に際して一人(ヒトリ)快々として悲歎に沈み無念の情に苦むの丈夫(マスラヲ)あり。之を可兒大尉とす。

大尉は忠勇無二の士。第二軍に屬して旅順の攻撃に向ふと聞きては君の喜びは譬ふるに物なかりしなり。

金州城は陷りたり。大連灣は取れたり。彌々旅順の攻撃なり。

作戰の計畫は整ひたり。各將校の攻口は定まりたり。

大尉の如きは即ち二龍山砲臺攻撃の命を受けたる一人。

實に千載の一遇。日本(ヤマト)男兒が忠勇を著はすの時こそ來りけれ。

大尉の勇氣は勃々として興り。大尉の熱心は日頃に百倍せり。

旅順攻撃の時期來るを遲しと待ちにけり。

時に天なるか命なるか。大尉の身上に一大厄難落ち來れり。日頃健全强壯の大尉は。此の大切の時に臨み。最も悪性の病魔に侵されたり。進軍には實に恐るべきの病性なり。而かも。總攻撃の時期迫るに隨ひ。病勢は彌々加はれり。

是に於て。大尉の憂苦は幾許なりしを知らず。

身躰の苦痛は。大尉の意とせし所には非らざるなり。大尉をして心痛に勝へざらしめたるは。旅順の攻撃に際し。任務を盡す能はざらむかとの懸念なりしなり。

旅順攻撃の時期は彌々迫まれり。大尉の病は益々重し。大尉の憂苦は益々深し。

彌々明治二十七年十一月二十一日とはなりたり。旅順の攻撃は今日。此の時。

此の日。旅順の攻撃に臨める。我が神洲の男兒にして。武勇を著はさぬ者は一人もあらざりしなり。然れども。誰か大尉の勇氣に及ばむ。

昨夜來。大尉の病勢は彌々加はりたり。身躰は衰弱を極はめ。實に。容易ならざるの容態にてありしなり。

然れども。「大尉意氣は少しも撓まず。部下を率ゐて。未明より。二龍山砲臺の攻撃を始め。雨下する彈丸を事ともせず。身を挺して猛進せり。」

大尉は既に。山頭に達せむとしたり。强堅なる砲臺は。大尉の勇氣に由て將に陷るに垂むとせり。

重病を冒して能く爰に至りしは。大尉の喜びに勝へざりし所ならむ。遂に能く敵の砲臺を陷れむ事は。大尉の誓て期せし所なり。」

然れども。天遂に大尉に此の名譽を與へざりしなり。大尉の猛進は却て大尉の病勢を激烈になしたり。心は彌猛にはやるも。遂に一歩も進む能はざるの窮困に陷りたり。是に於て絶躰絶命。「大尉は憾を呑んで。任務を部下の少尉に讓れり。」

憐むべし。堪へ難き苦痛を凌ぎ。諸隊に先き立ち我が隊を劇進せしめて。漸くに昇り來りし甲斐もなく。我が手に落ちむ砲臺をみす〳〵後に殘し置きて。再び山を下り往けり。

明治廿七年十一月廿一日は。抑も如何なる日なりしぞ。他の軍人の爲めには。古今未曾有の良辰吉日なりしなり。特り可兒氏の爲めには。最大最悪の厄日にぞありける。

人は皆な。忠勇を著はせるを喜び。世界無比の堅壘を攻落して。古今無類の大捷を得たるを祝ひ合へりしに。特り大尉の怏々として悲歎に沈み。無念遺る方なかりしは。實に宜べなりと云ふべきなり。

傷しや。旅順の山々に響き渡れる凱歌の優聲も。大尉の爲めには。無殘なる斷腸の響をぞ與へける。

旅順陷落の後。大尉は陣中に在て。鬱々として病を養ひ居りしが。一日飄然として出で往きて遂に還へらず。

翌日に至り急報あり。二龍山の絶頂に於て一士官の自殺せる者ありと。

衆馳せ往きて視れば。即ち前日出でゝ行方の知れざりし可兒大尉にぞありける。

大尉は銃を以て。見事に咽喉を打ち貫きて自殺を遂げたり。

大尉の懷中せし簡短の遺書は。大尉の心情を明に示せるなり。大尉の自殺を聞く者は。何人と雖も。袖を濡さゞる者は有らざるならむ。

世に。憐むべき人は決して尠なからざるなり。然れども。大尉の如き者は又多くは有らざるならむ。

大尉の死の如きは。實に哀はれなる死と云ふべきなり。而して又。大尉の死の如きは。實に勇死と云ふべきなり。實に壯死と云ふべきなり。

旅順陷落の際に。敵味方の死者は夥多なりしと雖も。敵にも味方にも。可兒氏の如く壯觀極はまれる死を遂けたる者は。他には決して在らざるならむ。

可兒氏の如きは。奮擊突戰の際。飛び來る彈丸に中て。止むを得ず

慘憺なる死を遂げたるには非らざるなり。

可兒氏の如きは。我と我が手を以て死せる者なり。而して。其の自殺たる。小心なる婦女子が。精神錯亂の爲めに遂げたるの自殺には非らずして。意識あり。自覺心に富むの丈夫が。沈思熟慮數日の後。强堅なる意志を以て靜に實行したるの自殺なり。

可兒氏の自殺の如きは。日本男兒の何物たるかを。普く世界に明示せる者なり。

可兒氏の如きは。實に窮困極はまれる悲境に陷り。克く之に處るの道を知れりし人なり。

二龍山の絶頂に於ける可兒氏の自殺は。支那四億の怯懦漢に。日本魂の何物なるかを指示す碑標なり。

汚名を後世に遺さむ事を恐れて。墓なく自殺を遂げたるの人は。

却て比類なきの勇士として。永く後世に英名を遺す者なり。交戰の始めより。連戰連勝。常に皇軍の勝を得るは。抑も如何なる原因に由るか。敵兵の怯懦なるに引き替へ。我が軍は可兒氏の如く。名譽を重んじ。廉潔極はまるの勇士を以て成れるが故なり。可兒氏の如きは。實に軍人の龜鑑たり。可兒氏の如きは。日本民族の代表者として眞に耻ぢざるの士なり。人若し。旅順の英雄は誰なりと問はゞ。予は斷然可兒大尉なりと答へむ。（明治廿八年一月作）

阪正臣

かな

人は言ふかなは漢字より出づ。漢字は本なり。今のかなかく輩その本の文字をよくも知らず。又よくも得かゝぬ故に、かなの某の字は漢字の何の字なるかもさだかならぬまでに書きくづしぬ。

本にそむき始にたがふ。いと歎かはしき事なりと言ふ。これ頑說なり愚論なり。漢字のかなとなりしはから人のみくに〻歸化せしに同じ。歸化して數十代を累ねたるもの、いかでゝから人といふべき。

既に皇國人となりはてたる上は、衣冠も言行も皆皇國風に改らんこと勿論なり。

これと同じくかな文字のすがたかたちの、本とかはりはじめと異ならんこと、何の歎かはしき事かあらん。余は却りてその變り違ひたる所の多きをよろこぶものなり。

このかなは皇國にもとより在來しものなるか。はた外國より渡りしものなるかといふことの穿鑿は、後世の人に一任して可なり。

紀貫之小野道風などのかゝれしかなは本を失はずといふげにさもあらん。そは歸化してよりいまだ年月の多く累ならざりし故なり。書の高尚優美なることはかれに讓るべきも、體はかへりてくだりし世のかたをまされりと思ふはいかゞ。

伊東中將　中邨秋香

霹靂一聲、雲ちりて。朝日耀く、威海衛。鳴る雷よりも、いかめしく。高く轟く、君が名は。四百餘州を、搖り動かして。六大洲に、震ふなり。

丁汝昌　同

四百餘州の、命綱。いかでたゝじと、一筋に。かけて賴みし、船いくさ。よすがも爲便も、白波に。折れて漂ふ、澪標。身を盡して

も、いとせめて。人の玉のを、つなぎける。心悲しな、ものかすかに。

學者　上田萬年

せつかくたのしい此世の中を
かたい理窟でむがむにきざむ
野暮じや先生ちよとふりむいて
こちらの花をも見やしやんせ

花　同

御國おもひて氣も結ぼれて
ひとりくよ〳〵樹の間を往けば
花が泣くなと意見する

與謝野氏を送る序

阪　正臣

孔子の教佛の法、何の道くれのわざ、所謂東漸せしものはいと多かれども、この大東のみくによりおこりて、西漸したるものゝ無きは、くちをしき事と思ひしに、あはれ命有ればうれしき世にも遇ふものなりけり。

みくにの道德といひ、みくにの戰畧といひ、何といひかといひ、今より後皆西漸して、かの韓清のくにたみは、ひとしくわがみくにを本宗と仰ぐに至るならん。それにつれてわか神ながらの敷島の道も、亦まさに西漸してかしこに盛んなるべし。

然思ふゆゑは、與謝野鉄幹ぬしこたび韓廷外務衙門の聘に應し、教育の重任をおひもたれんとすればなり。

そも〳〵このぬしの年こそわかけれ。歌よむわざに老けられたることは世人よく知る。このぬしにして今かしこの教育に心をつくさるゝ上は、わが道西せりといはんも强言にあらじ。

あはれ昨日旅順口におもむく一友を餞して、この道に足とき君を送るこそわがゆくよりもうれしかりけれとうたひしが、今日君を送るうれしさは、かれにまさること幾層なるかを知らず。乃また默すことあたはずして、

教へなば鈍き心のこま人もまなびの親の國や慕はん

中邨秋香

親睦會

吹くとなき、風に亂れて、散る花を。
とる盃の、霞にうけて。
あなおもしろの、けふのまとゐや。

暮れぬともよし、語らはん、花の蔭。

其　二

肌寒き、風にきほひて、鳴く蟲も。
かきなす琴の、調に入りて。
あな心ゆく、夜半のむしろや。
更けぬともよし、うたげせん、月の夜に。

春の夜

上田萬年

月もおぼろの春の夜の
空うち眺めなげくかな
色香なき身はまこゝろも

あはれとひこむ人もなく

夏の夜

同

むかし忍びてかたへの椅子に
ひとり仰れてたゞしみ〳〵と
ふかきつみとがわがわび居れば
木の間がくれの六日の月に
不如歸となきゆく時鳥

飲め〳〵〳〵〳〵

同

飲め〳〵〳〵〳〵大君の
千代萬代をことほぎて

飲め〳〵〳〵父母の
深きなさけを身にしめて
飲め〳〵〳〵この道の
ながきさかえを祈りつゝ
飲〳〵〳〵かの君の
すがたをこゝに思ひ出て
飲め〳〵〳〵もろともに
こゝろ打ちあけむつまじく

大阪人の一事業おこさんとするを　阪　正臣

難波津にさくやこの花　さきがけて事をなさんと

進みいでゝ功たてんと　いたづけるますらをのとも
水すらも石きりとほす　蟻すらも山ほりうがつ
ますらをの心振起し　たゆみなく勉め勵まば
何事か世にならざらん　何わざか世にとげざらん
その事の成りも遂げなば　冬ごもり春になりゆく
難波津のその花よりも　かぐはしき名こそ薫らめ
ますらをのとも

畫題

文學博士　外　山　正　一

某年某日。頃は秋の末つ方。時は黄昏。所は大森の「ステイション」。瀛車の來るを待つ折柄。二人の客を乘せたる車。息せき切つて挽き來る車夫「ステイション」に着きたり。客は下りたり。車夫は賃錢を請取

らむとして手を出せり。時に。心臟の破裂せるにや。錢を請取らむとして手を伸したる儘。楫棒の上に撞と倒れて絶命したり。二人の客は。外國人なり。賃錢さへ拂へば用はなし。車夫の死したるは。素より與かる所に非らざるなり。跡をも見ずして。早足に立去れり。「スティション」に居合したる。他の車夫どもは。驚きて死人の周圍に集りたり。時に。獨の老人。ホト〳〵として歩み來れり。群集車夫どもは老人の來るを見て。互に面を見合し。低語乍ら道をあけたり。老人は死人を見て。只茫然たる計りなり。是れなん。杖とも柱とも憑みたる子に。突然死なれたる親なり。諸君。今茲に見る者は如何なるものなるや。親を哺まむが爲めに。務めを爲して命を捨てたる男子は。死して其處に横たはれり。命を捨て取り得たる賃錢は。頭の邊に散亂してあり。無情なる乘客の後ろ影は。尙ほ遠くに

見ゆるなり。天下にも替へ難き一人の子に。遽かに別れて途方に暮れたる老人あり。鬼ならぬ車夫どもの。死人の孝行を褒め。老人の不幸を憐みて。低語者亦其所にあり。諸君。此れは是れ。深淵なる思想を表出し得るの畫題にあらざるか。予輩は畫人には非らざるなり。此の問ひに答ふると能はざる者なり。諸君は畫人なり。宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。

頃は明治の初なり。時は冬の最中なり。某月某夜。所は兩國橋の上。冴渡る冬の月は哀れなり。月の光に照らさるゝ。下なる水は物凄し。時は丑滿。往來の人も途絶たり。聞ゆるは只。幽かなる按摩の笛の音と。流るゝ水の音。欄干に寄り縋り。身を伸ばす者あり。身投なるか。身投なり。然れども。我が身を投げむとする者には非らざるなり。まだ。頑是も無き乳呑み子を。水中に投げむとするの男あり。

狂氣の如く必死となりて。男の袖に縋り付き。上なる子をば投げさせじと。爭ふ一個の童子あり。上には哀れなる月の眺むるあり。下には無情なる水の靜かに待つものあり。爭ふは三人の親子なり。貧に迫まり。途方に暮て。今や吾兒を水中に投げむとするの鬼親あり。足らぬ力も顧みず。我が弟を助けむと。必死に爭ふ兒童あり。親は惡魔なり。子は天使なり。惡魔が勝てるか。天使が勝てるか。稚子の命は助かりしか。予は之を知らざるなり。諸君。此れは是れ。深淵なる思想を表出するを得べき畫題にはあらざるか。予輩は畫人には非らざるなり。此の問ひに答ふると能はざる者なり。諸君は畫人なり。宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。さる年は何年なるを問はず。日は幾日なるを論ぜず。朝八時頃。某區某町に見るべき者あり。近在より。荷車に荷を載せて市中に挽き來る男あり。後ろより車を押す若き女あり。脊には紐を以て負へる乳呑兒あり。あら無情なり此の男。あら痛はしや此の女。女子の身にて車を押し。搗て加へて稚兒を負へり。日本は野蠻國なり。日本の男子惡むべきなり。年は何年なるを論ぜず。日は幾日なるを問はず。夕陽西に傾かむとするの頃。某區某町の町盡頭に見るべき者あり。快よげに。一輛の空車を挽き往くの男あり。否。空車には非らざるなり。車上には乳呑兒の口に乳房を含ませ。餘念なく子を愛するの婦人を載せたり。實に言ふに言はれざるの趣あり。朝に在つては地獄の觀を呈したるもの。夕に在つては極樂の觀を呈するものなり。大和男子無情なりとは何者の誣言なるぞ。粗服を身に纏ひ。妻子を車に載せて挽き往く此の男子は。身に美服を纏ひ。夫妻同伴双々兩々。馬車に乘り軸をきしらして往くの。王公貴

人に耻るものなるや。如何なる貴人の快樂と雖も。汗を流して今日の務を畢り。妻子を載せたる車を挽きて。今や我家へ歸らむとする。此の男子の快樂に。勝るものは決してあらざるならむ。日本の風俗は野蠻なるか。予輩は。野蠻の風俗を萬國に示さむとを願ふ者なり。此の觀物こそは。日本社會生活の困難を示すものなり。此の觀物こそは。日本女子の辛苦を示すものなり。此の觀物こそは。日本男子の性質を示すものなり。此の觀物こそは。日本帝國の宇内に存在する所以を示すものなり。此の觀物は。予輩一人の見るとを得るものには非らざるなり。何人も見るとを得べきものなり。和風の畫人にも洋風の畫人にも。此の奇觀を畫きたる者の無きは。予輩の了解に苦しむ所なり。諸君。此れは是れ。採つて以て畫題とするの價値なきものなるか。優美高尚なる思想を表出し

得べきの畫題にはあらざるか。予輩は畫人には非らざるなり。予輩は此の問ひに答ふると能はざる者なり。諸君は畫人なり。宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。（明治廿三年四月作）

春朝

中邨秋香

朝日に匂ふ、花の色。　霞に迷ふ、鳥の聲。
曉しらぬ、眠も覺めて。　見るものに、聞くものに。
心浮き立つ、春のあしたの、空や。空や。

其一

袖寒からず、吹く風に。　靡ける柳、散る櫻。
心の駒ぞ、そゞろに勇む。　思ふどち、野に山に、
手綱引きつれ、いざや遊ばむ、いざや。いざや。

音　樂

上田萬年

なが聲聞けば塵の世の
あだし願もうせぬなり
あめつちあひぬ物とけぬ
時も處もきえ果てぬ
ゆかしと常にわが思ふ
神代の春にかへるかな
なが聲聞けば塵の世の
あだし願もうせぬなり

同

オイテルペ

心の奥は知らねども

姿ははやくも見そめてし
清きゆかしきオイテルペ
われは迷へりなが笛に

君仁民忠の國

阪正臣

暴君惡王はいづれの國にもいと多かりしなり。然れどもわが國には、古より今に至るまでさる君王の出させられし事をさ〳〵聞えず。吾等は更なり吾等が祖先も亦大幸福の人々なりしなり。そも〳〵世界を造り人類を生し給ひし神の御心には、甲國の民を愛し乙國の民を憎み給ふが如き、偏頗あらせ給ふべくもなけれど、猶他の國とは異なる國體を授け置かせ給ふを見れば、神意は測り難きもの哉。

吾が歴朝の諸天皇、人民を愛撫し給ひしそのさまは、君にして親を兼ねさせられ、人民が其恩に感じて服従し奉りしさまは、民にして子を兼ねたりとやいはん。

支那などにては、君臣は義を以て合ふといひ、義合はざれば相離るゝも常の事なれども、吾が君臣の間がらはさる淺薄の縁ならず。諺にいふ截りても截られざる親子の縁なれば、義の合ふも合はざるも到底離れ得がたき親密の間柄たるなり。

他の國々にては、億兆既に群居したる上にて、其を統治せんが爲に帝王の出來しならんを、わが國は然らず。天皇まづあらせられて、然る後、その君の子孫やうやうに蔓延して、遂に國民となりたるなれば、同しく君職を盡させ給ふにも、他の國君の如く義務上よりする撫育にはあらで、眞實の衷情より起る愛惠なれば、國民

感激の深淺も亦同日の論にはあらざる也。

同じく勞役に服するにも、彼は臣民の道かくの如くならざるべからずと勉めて之に從ふと、此はわが君即父たる人の爲にかくして參らせんと、喜び樂みてこれをなすとの差異あるなり。

その實例は古今の史上に數知らず見ゆれど、中古以來は暫く置き、上古に就きて一二を言はん。

神武天皇日向の國高千穗の宮にまし〳〵て、何地に都したらんには、國民をして泰平を樂ましむることを得べきと思ひ煩ひ給ひ、且東方遼遠の地、いまだ王澤に霑はずして、邑長等相凌轢するが爲に、庶民塗炭の苦ある由を聞食し、遂に御心を決して東征し、平定の功を奏し給ひしを始め、

崇神天皇の我が皇祖諸天皇の宸極に光臨し給ふは、いかでか一

身の爲ならんと詔ひて、鋭意治を圖り、船舶を造らしめ池溝を掘らしめ給へるも、

垂仁天皇の殉死を禁し、又數多の池溝を作らしめたまへるも、

景行天皇の熊襲蝦夷などが、良民を虐ぐるを憂ひて之を伐たしめ給へるも、

成務天皇の境を定め國をひらきて、衆庶に便利を與へ給へるも、

神功皇后の新羅を征し給へるも、

應神天皇の諸博士縫衣女等を貢せしめ給ひしも、

又同天皇及履中天皇の各地に池溝を掘らしめ給ひしも、

允恭天皇の枉げて皇位に登り給ひしも、

雄畧天皇の諸國に桑を植ゑしめ給ひしも、

皇極天皇の雨を祈り給ひしも、

孝德天皇の改新の詔を下し給ひしも、

すべて皆民をわが子と思食し、深く厚く之を愛護し給へるが故ならざるはなし。

又彼の珍彥と聞えし漁人が、神武帝の御船を導き參らせしを始め、

崇神帝の御代の人民が、男の弓弭の貢女の手末の貢を奉りて、肇國しらす天皇と稱へ奉りしも、

天湯河板擧といひし人の、垂仁帝の御爲に諸國をかけめぐり、鵠を捕へて奉りしも、

泉媛といひし筑紫の豪族が、族を會へて景行帝に大御食を、獻りしも、

同じ御世に彥狹島王を、東山道十五國の都督に拜して下し給は

んとせしに、即て薨去ありしかばその國々の民慕ひ哀みて、竊に王の屍骸を盜み歸りて上野國に葬め奉りしも、

小子部蜾蠃が雄畧帝の勅語を誤解して國内の嬰兒を集めし折、人民皆天皇の命なりと聞きて毫も狐疑せず。己が愛子を奉りしも、

すべて是天皇を我が父我が宗家と信じ奉り、親み參らせ、これが爲に勞働し之か爲に奔走するを以て光榮としたりし、當時の民の衷情を證するに足る者也。

なほ言はゞ萬葉集に載れる營藤原宮役民の歌に、

やすみしゝ吾が大君　高光る日の御子
荒栲の藤原が上に　食國をめし給はんと
御あらかは高知らさんと　神ながら念ほすなべに

天地もよりてあれこそ　岩橋の近江の國の
衣手の田上山の　眞木さく檜の杙材を
物部の八十氏河に　玉藻なす浮べ流せれ
其を取ると噪ぐ御民も　家忘れ身もたなしらず
鴨じもの水に浮居て　わが造る日の御門に
知らぬ國よりこせ路より　我が國は常世にならん
圖負へる奇しき龜も　新代といづみの河に
もちこせる眞木のつまでを　百足らず筏に作り
沂すらんいそはく見れば　神ながらならし

と詠じ、その外遠津神わが大君と尊び奉り、

又は大君は神にしませばともたゝへ、

天皇のみこと畏みともいひたる歌かぞふるに遑らず。

上古の歌虚僞すくなければこれによりて明かにその意志を察し得らるゝなり。

かく盛んなりし人民が尊王の意志も、中古より聊衰へたりしは、儒教の天爵を重んじ佛教の現世を輕んずるが如く見ゆる說どもにひかれたると、權臣等の朝政を私してその極戰亂のみ打續く世となれるによるならん。

あはれさばかり深厚なりし天皇たちの御惠も、かゝる事どもの爲に下民に徹底せず。隨ひて天地日月と共に相並びて輝かせ給ふべき大御稜威も、いつしか浮雲の中に隱れ蒿萊の下に埋れ果てしありさまとなりにけんは、くちをしとも慨たしともいはん方もなし。

天運循環して明治維新の御代を來し、今上叡聖慈仁にましゝて、朝廷の御光は往昔にも遙に立ちまさりて、宇內に普く滿亘らんとする時至り、闔國人民の心情も亦古代の潔白忠良なりしに立復らんとするに際し、恰も泰西の學說を輸入し、ある一派の說はわが國固有の美俗を壞らんとするものなきにしもあらざりき。

かくの如きは蓋し末弊の然らしむるにて、決して彼の國文明の眞趣を得たるものにあらざるべし。

聞けば彼の文明の諸國にも、皆ほど〳〵に忠君愛國の氣象ありて、內は各自の富强を計り、外は他邦の輕侮を禦げりとか。

こはさもあるべき道理にて、苟も國民にして此の精神なからんには、國力の强盛ならんことはさておき、一國の獨立を保たんことすら難かるべけれはなり。

とまれかくまれわが國人は、わが國に固有にして祖先以來遺傳せし所の、忠良の心を培養し振起し磨礪し擴充して、神の定めし國體を傷けざらんことをつとむべきなり。

迷へる母

文學博士　外山正一

背負ひたりし子は何地行きけむ。
抱きたりし子は如何なりつる。
待てども待てども歸り來らず。
呼べども呼べども答を爲さず。
他處の母は子を背負へり。
他處の母は子を抱けり。

我にも背負ひたる子はありしに。
我にも抱きたる子はありしに。
駈來るは、我子なるか。
近づけば、我子にあらず。
遊ぶ子は我子なるか。
よく視れば我子にあらず。
笑ふ子は我子なるか。
哭く聲は我子の聲か。
迷へる母のあだの夢なり。
我子は早や哭きもせず笑ひもせず。

子に別れたる母親の。
冬の夜に獨り欝々。
物を思へばともしびの。
光もくらく哀れなり。

何やらむうつゝ心に。
抱き寄すれど物はなし。
悲嘆に沈む寝顔に涙。
如何なる夢をか見しならむ。（明治廿五年五月作）

中邨秋香

見渡すかぎり

見渡すかぎり、松さくら。楓もちの木、さま〳〵の。木々植ゑわたし、ませゆひて。數もしられぬ、おくつきどころ。松の梢に、高さをきそふ。みかげの石に、千よろづの。文字ちりばめて、ありのよの。事ぐさしわざ、つらつらに。こちたきばかり、かきしあり。玉かとばかり、ひかり、ある。大理石のうるはしきに。そのおくり名も、その文字も。いといかめしく、ゑりしもあり。くろがねのいかき、赤がねの燈籠。庭ハみながら、石しきなめて。さもおごそかに、しつらひしあり。めぐりの檜の木、すが〳〵しく。志とねの如き、芝生の中に。榊一もと、うゑしもあり。片枝おほへる、松蔭しめて。根生川石の、みやびかなるに、ことばに歌に、ゑりつけて。石ぶみのごと、たてしもあり。

あゝ大かたの、世にある人。高きいやしき、ほどほどに。朝まだきよ

り、夜にいたるまで。西にいそしみ、東につとめ。心をくだき、身を苦しめて。營むものは、何事ぞや。國のためか、世のためか。はた身のためか、妻子のためか。

誰かはいはぬ、世のためと。誰かはいはぬ、國のためと。名こそ世といへ、國ともいはめ。なからんのちに、ことゝはゞ。その名もわざも、鳥邊野の。夜半の烟と、あとなく消えて。殘るは骨と、妻子とのみ。

見渡すかぎり、數もしられぬ、此おくつきよ、いづれか昨日の、よの人ならぬ。ゆくをかなしみ、昨日をしのぶ、今日のよの人。いづれか明日の、おくつきならぬ。あさはかなき大かた人のよのさまや。あるよのかぎり、安き空なく、いたづきぬるも。おもへばたゞに此おくつきを。造らんまでの、爲なりけり。思へばたゞに、此おくつきを、まもらん人のためなりけり。

みよかし、芝なる義士の墓。いと事そげる伊豆石の。年をさへ經て、苔むしたるを。また見よ、目黑の青木の塚。品川の縣居のおくつき。草にうづもれ、蔦はひまつはれ。文字さへ今は、さだかならぬを。あはれみよかし、これらの人の。ありし其よの事ぐさしわざは。身こそうせぬれ、骨こそ朽ちぬれ。千代に傳へて、苔むす石も、光をはなち。蔦はふつかに、錦をまとひて。手向の榊、どこしなへに青く、志きみのたきもの、絶ゆるよなきを。あはれさてこそ人のよに。うまれ來にけるかひもあらめ。

あはれあはれ、見渡すかぎり、めもはるかなる、このおくつきどころ。うるはしく、花はさけども。ふりはへて、とふ人もなし。色ふかく、紅葉は染むれど。たちよりてみる人もなし。常盤木の、しげみがくれに、友よびかはし。啼くなる鳥の、こゑばかりして。

偶感

上田萬年

身は谷川のもみぢ葉か
よるべもなみに流れゆく
盛りの色はきのふにて
明日はいづこの塵ならむ
鐘の音さびし風さむし
こゝろの空も時雨れつゝ

二葉の薫

阪正臣

日本心の花と咲く、櫻井驛より汝を歸し、教へ給ひし父上の、仰せは既に忘れしか。

獅子は生れて程も無く、千仞の溪にはねかへり、栴檀の樹は二葉より、高き薫を發つなり。おん身幼くありとても、父が子ならばよく思へ。腹きれとてはかへされず。跡を吊へともものたまはず。たとひわれ陣歿すとも、天子この世にまします限りは、一族郎黨を勞はり、軍をおこして朝敵を滅し、叡慮を安め奉れ。

これこそ父の御詞と、妾に傳へおきながら、傳へし御身はや忘れ、自害せんとは何事ぞ。血まよひたるか正行よ。

と母が詞に鞭うたれ、心の駒をたてなほし、童遊のいくさにも、朝敵を伐ち滅さん。尊氏が頭を斷らんとの、望の外に望無き、心の中こそゆゝしけれ。

かくて月日に淀み無く、盛の齡になりぬれば、家の子あまた引つれて、芳野を守護し奉り、所々のたゝかひに、功名手からあらはし

て、末頼もしき若武者と、帝もおぼしめされしに、逆賊高の師直等、雲霞の如き勢を率ゐて、芳野の宮を攻めんとす。正行帝へ奏すやう、君の御爲父の爲、命を棄てゝ忠孝の、名をとゞむべき時來たり。敵の首を取り來るか。臣が首を取らるゝか。二つ一つの軍せん。これぞ最後の御目見えと、涙を袖にかけにけり。南殿の御簾を捲かしめて、御前近く召させられ、龍顔いとも麗しく、二度の軍に打勝ちし、功を深くめで給ひ、股肱とたのむ汝なり。その身を輕く思ふなよ。障碍さ疑さ定め奉り。この勅諚に正行は、答へ申さん詞無く、塔の尾さして罷りいで、如意輪堂に敷島の、大和言の葉彫付けて、四條畷にうちむかひ、目に餘りたる大軍を、右往左往にきりやぶり、飽くまで敵を惱まして、飯盛山の山本に、草むすかばね大君の、爲に斃れし大丈夫は、げに

獅子よりも勇ましく、栴檀よりも香しき、名を後の世にのこしけり。名を後の世にのこしけり。

元始祭

中邨秋香

天地の共、限なく。傳へましまし、神たから。
祝ひ拜み、幾萬世に。祭らす今日こそ、たふとけれ。

其　一

齋のかゞみ、明らけき。光仰ぎて、天津日の。
照さん限り、いや遠長に。祭らす今日こそ、惶こけれ。

吉野懷古

同

夕日雲に、かくろひ。風ハはだへ、寒しも。
あゝ。いづらその、昔のあと。苔路一すぢながし。

其　二

鳥は春を、歌へど。山はとはに、靜けし。
あゝ。年のはに、高嶺の花。ひとり咲きては、散るも。

上田萬年

深き迷

深き迷のはれ行けば
今は涙のほかぞなき
つらかりし君はやさしくも
われを救ひの神にして

阪正臣

言擧（コトアゲ）

劒を揮ひてむかふ者あらば、劒を揮ひて防ぐもよし。理窟を言ひてむかふ者あらば、理窟をいひて防ぐもよし。
その劒をふるふ者をすら、口さきにて退くるは智者のわざなり。」
口さきにてむかふ者を防ぐに、劒を用ふる者あらば、いかでか之を勇者といはん。
わが國のいにしへ人言擧せずとあるは、支那あたりの議論かまびすしき國風にくらべていへるにて、今とても西洋あたりにくらべなば、わが國はなほことあげいとすくなき國がらなるべし。」
さはれかの西洋の學術風俗日にけにさみひろがり、議論を好む人もまた年月にふえまさる世のさまなれば、黑しと定まれるものをも理窟をつけて白しといひなす人も多くなりなん。
有りと極まりし事をも疑惑をおこして無しとときなす人も殖えゆきなん。

そを憂ふる人憎む人はた多かるべし。

憂ふるまゝにかゝるやつこ世に無くもがなといひ、憎むまゝに撃ちも殺さばやと思ふ人なきにしもあらざるべし。

されどそはあるまじきわざなり、かひなき事なり。

もしそれを憂へそれを憎まば、その理窟をうちくだくべき眞理をたづぬべく、その疑惑をはらさしむべき事實を見出すべき也。」

志からずしてその人を滅さんと思ふは、智者にはあらざるなり勇者にはあらざる也。

たとへその一二人は滅びぬとも、反對の眞理明かならずして、辯解の議論正しからざらんほどは、埋窟をいふもの日にけにあらはるべし。疑惑をおこすもの年月にいで來ぬべし。

いでやいつまで言擧せぬ國人にてはあらん。ことあげせよ〜

わがともよこらよ。

福島中佐

中邨秋香

天の戸渡る、月毛の駒の。あがきに起る、はやち風。雲をなびけ、霞を穿ち。山また山、河また河。ひづめの塵の、たちまちに。蹴破る三千八百里。

過行くところは、野蠻の國。伴ふものは、只此駒。あはれその駒も、やがて倒れぬ、ほるちの山。

風なまぐさき、志べりやのゆふべ。月ほのかなる、かざんの曉。霧は毒を送りて、目たゞちにくるめき。露は膚を犯して、骨ほと〳〵くじく。あはれ、こゝにいたりて、誰かまた。魂消えて、こゝろざし碎けざらむ。

君はいきほひ、ます〳〵するどく。新駒うをるに、一鞭あて丶。忽ち登る、あるたい山。み空に聳つ、うらんたはの。高嶺の巖に、まるしをとゞめて。露國を顧み、打ほゝゑみ。一聲殘す、さらばの言の葉。

あゝ勇ましや、心地よや、日本皇國の、益荒男は。そのとり佩ける、劒の如く。雄々しくもまた、惶こきものと。至るところの、國々こぞり。

鳴神の音に、きゝ驚き。稻妻の目に、まばゆく見つゝ。感けかしこみ、めで慕ひ。我おくれじと、送り迎へ。喝采の聲に、おくられて。駒のあがきも、いと平らかに。今日しも皇國に、かへるきみ。

あゝ君が名は、はやく世界の、歷史にのぼりぬ。朽ちなばくちね、高根の巖。あゝ君が譽は、廣く世界に仰がれぬ。高さくらべよ、あるたい山。勇ましき哉、心地よきかな。

戀

上田萬年

戀とはなにぞ父上よ
戀とはなにぞ父上よ　かく問ひまつれば父上は
われにむかひて嚴かに
天なる神よとのたまへり

戀とはなにぞ母上よ
戀とはなにぞ母上よ　かく問ひまつれば母上は
わが頰なでゝゑましげに
そなたの父よとのたまへり

戀とはなにぞ兄上よ
戀とはなにぞ兄上よ
かく問ひまつれば兄上は
わが手を取りてのどやかに
春のひかりとのたまへり

戀とはなにぞ姉上よ
戀とはなにぞ姉上よ
かく問ひまつれば姉上は
われをいだきてひそやかに
誠の熱よとのたまへり

さはそづかしき問ひなりき
さはそづかしき問ひなりき
げにも戀とはこひの事
今しもはじめて覺りえぬ
あはれ戀とは戀の事

文學博士　外山正一

吊詞

諸行の無常なるは人皆之を知る。死生命在るは又之を知らざる者なし。

然れども。有爲多望の士の不幸短命にして死するを見れば。何人も之を悲まざる能はず。其の人の爲めに哀むなり。親戚朋友の爲

めに哀むなり。國家の爲めに哀むなり。

今や文學士日高眞實君の遠逝に當て。殊に哀惜に堪へざるものあり。

篤實は人に最も缺くべからざる性質なり。然れども。之を具ふるの人未だ世に多きに非らず。

勉强は事を成就するに最も必要なる條件なり。然れども。勉强家は決して世に多なるに非らず。

學才は學者の最も多く有するを欲する所なり。然れども。其の乏しきを憂ふる者實に少なしとせず。

日高君の如きは。其の性質極めて篤實にして。且つ頗る學才ありて。而かも勉强心に富まれたる者なりき。

君の學生として大學に在るや。品行方正。學力優秀を以て常に稱

せられたり。

君の特性にして就中賞讃すべかりしは。世人動もすれば奢侈に流れ易き今日に於て。常に極めて質素を旨とし。官祿位階あるの日に至ても。昔日學生生徒たりし時と。少しも異なるとなかりしの一事なり。

然れども。君の遠逝に際して。大學及び國家の爲めに更に愁ふべき者あり。

本邦教育の事業たる。稍々完全に赴きたりと雖も。改良を加ふべきの點尙ほ決して少なからず。蓋し。教育學の未だ充分に研究せられざるが爲めなり。

教育學者を以て自ら任する者。輓近本邦に少なからず。然れども。深く哲學を修め。其基礎に依て教育學の實踐考究を謀りたるは。

實に君を以て嚆矢とす。君の海外に於て深く教育學を修めて歸朝せらるゝに當てや。大學は實に良教師を得。教育界は無比の研究家を得たり。是に於て。本邦の教育學は將に大に勃興せんとしたり。然るに。此の多望ある學士は。忽地にして遠逝せられたり。左なきだに哀を催す秋の時に。良夫を失へる妻あり。孝子を失へる親あり。良友を失へる友あり。良師を失へる學生あり。國家は良公民を失ひたり。大學は良教授を失ひたり。教育界は熱心なる研究家を失ひたり。實に悲の至に勝へざるなり。（明治二十七年八月廿二日作）

親友

中邨秋香

同じ机に、書讀みかはし。一つ硯に、墨すりあひて。

學の窓の、明暮さらず。睦びし友、あはれ其友。嬉しき事も、又憂きふしも。共に語らひ、かたみに告げて。力となりも、なられもしつゝ。うたゝこゝらの、年月も經ぬ。あはれ其友。さはれ其友。さばしと言ひて、立ち別れしは。去年の此月。三月すごさで、歸り來なんと。賴めしものを、あはれ其友。

さうびと墓

上田萬年

墓はさうびに問ひていふ
朝な〳〵におく露を
いましが身には何とする
さうびは墓に問ひていふ
日々に問ひくるひと〳〵を

いましが宿には何とする

さうびはこたへてないぶかりそ
そのおく露は色に香に
わが身に入りて愛となる
墓もこたへてなうたがひそ
その尋ね來るひと〳〵は
わがやに入りて神となる

土田萬平

熱海の二十六夜待　中邨秋香

鷹の巣山に日つく入日。波の夕ばえ、影あせて。沖よりよする、墨染のゆふべの色。

安房に、上總に、大島、はしま。見る〳〵暮れて、横磯の磯によせくる、浪ばかり、ほの〳〵白し、熱海の海。

湯あがりの、袂涼しく、秋告げて。吹き來る浦風。あな心地よの、浦風や。

欄干によりて、見渡せば。三つ四つ二つ、いさり火の。浪路はるかに、あれ〳〵、見えつ隱れつ、火影かすかに。

二十六夜の、月待つと。軒端のいよすゝどり〳〵に。碁を圍む人、將棊さす人。あるは骨牌に、糸竹に。酒酌むもあり、茶のむもあり。唐歌吟じ、謠曲うたひ。おのがむき〳〵、はふ蔦の。つたなきわざも、興そへて。

見し漁火は、影消えて。あやめもわかぬ、闇の夜に。雲か浪かの。疑と、ともにほのめく、東の海。

これや待ちつる影ならん。待ちつる影は、今こそと。皆欄干に、よる
浪の音よりほかは、聲もなく、眺むる沖の、水や空。
たちまちきらめく、二點の光。水にうつりて、三つかあらぬか。あは
とみるまに、安房の沖。二十六夜の月は出でぬ。ひかりはあかく、影
あざやかに。安房の沖、二十六夜の、月はいでぬ。

櫻井　　阪正臣

底すみわたる櫻井の　水驛こそ君親に
仕ふる道のかゞみをば　千載の後にとゞめけれ」
その水鏡きよくとも　大き小き楠の
操の影をうつさずハ　あまたの人に汲まれめや」
その楠もきみが爲　枝葉つくして捧げたる

いさをし無くば天地に　高き薫の溢れめや」
かをりゆかしき楠の　親子の君を鏡にて
われらも花とさくら井の　清き名を世に流さまし」

山中雜興　　中村秋香

瀧の響、松の風。心とはに清く。
花の色、鳥の聲。月日そゞろに長し。
雲を分けて、苔に臥し。露に醉ひて歌ふ。
峯の春、谷の秋。誰か知る、此こゝろ。

古城　　同

山もさくべき、関の聲。
矢さけびすごく十重二十重。

攻めよる敵を、一まくり。
拂ふや花の、朝あらし。
烈しかりつる、跡とへば。
けふさへ寒し、千早風。
其一
岩垣崩れ、咀くえて。
跡はかもなき、山畑に。
むかし尋ねて、飛ぶ小蝶。
よし其あとは、うもるとも。
朽ちぬ其なの、花の色ハ。
今も匂へり、かぐはしく。

山茶花

上田萬年

なにを求めん心なく
森の樹の間をわけゆけば
巖のかげにさゞん花の
色なつかしくさきにほふ

そを手折らむと立ちよれば
かはゆき聲にその花の
いへりける樣いたづらに
つまれてかるゝ我身かは

根ごとしぬきて我宿の
まづけき園に植ゑしより

枝葉もさげく生ひいでゝ
さかえこそすれこの日頃

御苑觀菊　同

いかにたのしき事ならむ
このうつくしき御園生を
かしづきまつる母上と
ともにながめて我ゆかば
娘なき身のくやしさよ
妻なき人のあはれさは
君が千年の御榮も
ともにめづべきものはなく

土田萬平

あはれ老いたる親の身に
あすはめぐみの露ふれや
ためしは古くもあるものを
めこのみ君が御民かは

阪　正臣

歸化

嗚呼寛なる哉大なる哉日本國の度量、開闢以來數萬の外人の歸化を容れたり。

此國は彼等外人の歸化を容れしのみならず、彼等が國の政事法律をも歸化せしめたり。

文學宗教をも歸化せしめたり。衣服の制殿舍の構造をも歸化せ

しめたり。
われに歸化し來りて彼に滅盡せしもの有り。仁義の行忠孝の心等是なり。
今や仁義も忠孝もかの國に在りては、只徒に口に唱へらるゝのみにて、これを實際にせらるゝこと能はず。
蓋今のみにもあらず。遠く上古に在りて、殷湯周武の如きすら皆之を冷遇したり。況んや他の暴君汚吏をや。
嗚呼仁義よ忠孝よ。汝は寛大なるわが大日本國に歸化して後、はじめて其職を盡すことを得たり。はじめて其任を全くすることを得たり。
汝の本國はまかく汝に不適當なる土地なりしなり。汝の性質は實にわが國に恰好したる也。

汝歸化してより遠くは蒐道稚郎子をして位を皇兄に讓らしめ奉り、近くは德川將軍をして政を聖上に還し奉らしめしが如き、豈その職を盡し任を全くせしの大なるものにあらずや。
目今と今後とを問はず。予は外國より入來る百般の事物は、皆この仁義忠孝の如く歸化し去らんことを望む。併せてわが大日本國に望む。只彼等の歸化を容れ彼等をして國内に自立せしめざらんことを。

銀婚式

中郵秋香

天の御柱たちまちに。二十とせあまり、いつしかと。回りて今日の、大御式。千代の御契、かずよめば。はるけき御末も、八尋殿。

其　二

たぐひなき世に、例なき。この大御式、ことほぎて。都に鄙に、諸人の。千代に八千代と、祝ふなる。聲こそとよめ、天地に。

百合

上田萬年

峻しきいはほの上にして
氣高くにほへるさゆり花
たゞ氣高くていたづらに
過ぎなばかひもあらじ世を
命を捨てゝ身も捨てゝ
なをなつかしみ尋ね來む
人もしあらば蝶々の
輕き心といなまずて

折られても行けさゆり花
折られても行けさゆり花

明治廿八年一月一日を迎へてうたふ歌

中邨秋香

年たちかへる、うれしさは。いつとなけれど、別きてこの。今年の今日は、いにしへに。ためしも聞かず、今の世に。たぐひをも見ず、天地も。あらたに開け、世の中も。改まれるか、とばかりに。見る物ごとに、勇壯ましく。聞く事ごとに、光彩ありて。樂しき空や、今朝の空。曉告ぐる長鳴鳥。天の岩戸の、明けそめし。神代をうたふ、聲ほがらかに。横雲の空に、とぶむら鳥。鳴音さやかに、檀原の昔の春を、よばふなり。

瓦の霜に、かゞやく朝日も。大路の氷、吹き解く風も。新年いはふ、馬

くるま。君が代うたふ、童とゝもに。今日をことほぐ、心地して。門に立てたる、松竹は。一しほ深き、綠の上に。また一しほの、綠をくはへ。軒にかゝげし、日の御旗。その紅の、幾しほに。尙ほ幾しほの、色こそ匂へ。

あゝその松竹よ、其の御旗よ。今朝は皇國の遠つ縣。九連城に、また鳳凰に。大連旅順の、みなとみなと。輝く日影に、光を競ひ。吹く朝風に、ふしなびきつゝ。ゆたかに年や、迎ふらん。めでたき今日や、祝ふらん。

あなよろこばし、あなられし。四百餘州、おしなべて。都にひなに、門ごとに。松竹たてゝ、この御旗。軒に揭げて、打靡く。けしき見ん日は、明日にやはあらぬ。

天の岩戸の、神代より。また橿原の、昔より。ためしも聞かず、たぐひ

なき。今日の此日は、即てまた。更にためしも、たぐひもしらぬ。國の光のかゞやくべき。愛たき年の、はじめと思へば。あなよろこばし、あなられし。祝ひてうたへ、諸聲にうたひていはへ、今日の此日を。

新年

阪　正臣

年たつ今朝の長閑さよ　松竹たつる門ごとに
朝日の旗の影さして　すゞろに勇む人ごゝろ

二節

年たつ今日のたのしさよ　おいたるわかきおしなべて
とはれつとひつむつましく　君が代千世と祝ふなり

ミニヨン

上田萬年

君のみぞ　知りて居ます
つらき思ひを　知りまさむ
たゞ君のみぞ　われのなげきは
唯ひとり　身に添へで
世のたのしみも　うちながめ
あなたの空を　われはしも見る
我をしも　君はとほし
めで知り坐す　むねも身も
目も眩めきぬ

君のみぞ　さけやをはらむ
つらき思ひを　知りて坐す
たゞ君のみぞ　忘りまさむ
われのなげきは

上田萬年

わすれてもわすられなくに君がます
空うち眺めわがひとりなく

霜夜の鐘

中邨秋香

とほちの鐘の聲、さやかに聞えて。
板屋の霜の上に、更けゆく夜の月。

越山併せ得し、その世の秋も。
志のぼるゝ空に、鳴きゆく雁がね。

其二

功業期しがたく、年人を待たず。
傾く月に身を、照らして思へば。
あゝあゝ幾ばくの、我が世の程ぞ。
更くる夜の影は、よそにはめぐらじ。

死にむかひて

上田萬年

心のまゝに尋ね來よ
われにそなへはそなはれり
愛でにし花も散りぬれば

愛てふにほひも失せぬれば
今は夕日の影くらく
世には願ひもなかりけり
心のまゝに尋ねこよ
われにそなへはそなはれり

招魂社

阪　正臣

水漬く屍と身をも惜まず　草生す骸といのちも捐てゝ
國の爲に君の爲に　盡さゝいさを高くもある哉

二節

千木やかつを木雲に聳ゆる　やしろに祭られ世に仰がるゝ
奇御魂のそのひかりは　山をも照し水をも照せり

歳暮感懷

中郵　秋香

霰たばしり、風あれて。人足まばらに、八街に。
門松ひさぐ、聲すなり。ことしもやがて、暮れぬとや。くれぬとや、

其　一

花にやどれる、春の鳥。千草に眠る、秋の蝶。

其　二

結びもとめぬ、夢のまに。はや一年は過ぎにけり。過ぎにけり。

其　三

書讀む窓の、雪螢。闇はてらさで、いたづらに。
頭にのみや、つもるべき。たゆまず學べ、時の間も。時のまも。

輸卒

文學博士　外山正一

某年某月某日某處に於て。口角沫を飛ばして。二人の囂々激論する者あり。其の一人は。身體長大。容貌魁偉。身に軍服を纏ひ。腰に劒を帶びたる者。其の帽。其の服に由て。彼は砲兵に屬する者と知られたり。

當時其の爭論に耳を傾けし者は。即ち知りしならむ。其の爭點たる。輜重輸卒の名譽に大いに關する者なりし事を。

事の起りは。或は誤解に出でしやも知れず。然れども。彼れ砲兵の爲めには。聞き捨てにならぬ事のありしと見えたり。

彼は。熱心に且つ憤然として。對者を叱し。對者を諭しゝなり。

歩兵なるも騎兵なるも。砲兵なるも輸重兵なるも。同じく國家の爲めに盡す者なり。固より互に瑣少の尊卑だにあるなしとは。彼れ砲兵が。熱心を極はめて辯論せし所なり。

一兵卒と雖も。我が軍人の能く義理を解する。斯の如くなるは。當時其の塲に居合したる人々の。何れも嘆賞に堪へざりし所なり。」其の身軍人にてあり乍ら。自ら戰ふの機會を得ざる者。彼の。輜重輸卒の如きは。吾人の同情を最も促さむとする者なり。輜重輸卒の如きは。其の勞最も多くして。而かも。勳功を立つるの機會。最も尠なき者なり。

寒風膚を劈くも。飛雪面を撲つも。强雨は身を浸し。凍傷は是れ迫るも。雪を蹴り氷を踏み。若しくは泥中に入りて。晝となく夜となく。疾勞るゝも息ふ能はず。人の食するも食する能はず。人の眠るも眠る能はず。孜々として往き孜々として來る者。斯の如きは即ち輜重輸卒の境涯なり。

兵卒は如何に忠勇なるも。將官は如何に智略に富むも。料食彈藥

にして缺乏を告げむか。彼等は又如何ともする能はざるなり。砲兵をして歩兵をして。克く戰ひ克く勝たしむる者は。彼れ輜重兵の力。與て多しと云ふべきなり。

彼れ砲兵が。輜重輸卒の名譽の爲めに。熱心を極はめて辯論せるは。實に宜べなりと云ふべきなり。

明治廿八年三月九日。田庄臺の攻擊に際し。彈丸雨飛の間に在て。衆に先んじ。一際目立ちて奔走するの一輸卒ありしが。戰ひ當に闌なるの時。哀れ一丸の爲めに。左脚に大傷を受け。地上に撞と倒れたり。

戰友。此の有樣を見。直ちに馳せ來りて。率きたる馬を放さむ事を頻りに勸む。

然れども。彼れ更に肯ぜず。『我れの死は惜むに足らず。此の馬。此の

彈藥は戰鬪上須臾も缺くべからざるものなり。我が命脈のあらん限りは決して此の手綱を放つ能はず。卿等安心せられよ』と。斯く云ひて益々手綱を握り固めんとしたりしなり。

奇特なり彼の心。殊勝なり彼の辨へ。世界何れの國にか斯の如き輸卒ある。

茨木縣人山崎由松。彼は亦眞正の日本男兒なりしなり。彼の一言の如きは輜重輸卒の任務たる。如何に重大のものなるかを。普く天下に示さしものなり。

山崎由松。彼の振舞の如きは。一兵卒の擧動と雖も。如何に壯嚴を極はめ得べきかを。吾人に親しく示さしものなり。

惜むべし。醫術の効なく。彼は遂に長眠の客となりしなり。

皇軍の安危の外には。更に餘念なかりしの丈夫は。任務未だ終らざるに。衆に先ちて斯く世を去れるは。實に遺憾にてありしならん。

然れども。其の任務を盡すの道に至りては。彼の如きは醇化の極に達せし者と云ふべきなり。何者の理想か將た之に過ぐる者あらん。何んぞ甘んじて瞑目せざらんや。

然れども。彼の潔き最期に關しては。轉た感慨に勝へざるものなきに非らず。夙に夜半に。彼が忠義の手を以て率きたりし手綱は。今は何人か之を執れる。馬は果して其の主の替はりしを知れるか。馬は果して憂ふる所あらざるか。

然れども。更に悲哀に勝へざる者あり。丈夫逝けり。而して家には。老いたる父母の。唯々茫然とする者あり。

丈夫逝けり。而して家には。助なき妻の。人目を忍びて泣く者あり。」

丈夫逝けり。而して家には。蒙昧き小兒の。父の歸りを何時か何時かと。母に尋ぬる者もあり。（明治廿八年五月作）

ひとこと

上田萬年

かくて生きむは涙なり果てしなき主の替りはなかりけり
愛したまはゞ一ことに忠義の手をとりたまへ
かたらせたまへ御心を
語らぬうちや戀ならむ
なきてわたるぞ命なる
その一言はあの世にて

問答

上田萬年

はしきわぎみがうれしくも
贈りたまへる花さうび
花よいましにこと問はん
君は何とかのたまひし
あはれおろかのことゞひや
戀ふるにことばやありぬべき
語り得べくはいたづらに
われやはかくも使ひせん

成歡のたゝかひ

阪　正臣

見よや見よ、文化日々に進み武力月々に加はり、まかも海を隔つる隣國の厖弱なるを愍み、之が獨立を鞏固ならしめんとする義俠軍、その勢いかに猛烈なるかを見よ。

韓廷すでに滿清の恃むべからざるを知り、力を我に仰ぎたり。さらばまづ牙山の敵を逐ひ拂へとて、七月廿七日夜なほ深きに、三軍肅々として打ち立ちたり。

生憎や安城渡は、敵を安からしむる名にして、味方の爲には全く憂き瀨たりしなり。伏勢さかんに起りて飛丸は松崎大尉を斃したり嗚呼。

然れどもこの勇士が殘念と叫びし一聲は、大に味方の士氣を激せしめて、非常の激戰となり、砲聲萬雷吼え、硝煙大霧おほふ。

況んや又吶喊の聲に山河震動し、榴彈の散るに敵兵微塵となる。味方は固より命を君と國とに捧げたり。何ぞ一歩も退かん。

既に敵の一壘を破りたり。二壘三壘つぎ〳〵におとしいれしかば、之を守りし木葉武者の散りかふけしき、秋の林に嵐の渡るが如く、跡には血の川骸の山を殘せり。

嗚呼厖弱を扶け暴虐を膺つ義俠心よりおこりたる文明のわが軍、捷ちたるはもとより恠むに足らず。是天の心なり。

凱旋門のほとりには人の波をよせたり。その人々は大島將軍の手をとりて歡呼したり。曰く日本帝國万歳天皇陛下万歳。

皇國の旗

中邨秋香

百千のいかづち、空に轟き。うづまく烟は、海を覆ふ。龍は雲に躍り

て、稻妻ほどばしり。虎は風に吠えて、激浪さかまく。天柱みる〳〵
碎け、地軸たちまち拆け。濟遠逃れ、廣乙敗れ。高陸沈みて、操江は降
る。あな心地よや、勇ましや。皇國の旗の、日の光。先こそ耀け、豊島の
海。

大砲小銃、鬨の聲。峯を動かし、谷を搖り。屍は積みて山をなし。血は
たゞよひて、川を漲らす。一壘落ち、二壘破れ、三四五六、みな支へず。
風聲鶴唳、逃げ散る敵。飛鴉流電、追ひ擊つ味方。あなこゝちよや、勇
ましや。皇國の旗の。日のひかり。またも耀く、成歡の山。
浪ぢかなる、瑞穗の國。あきつしま山、うら〳〵と。今こそ昇れ、朝
日影。空には翔る、八咫烏。錦の御旗や、導くらん。海にハをどる、大小
魚。大御船をか、負ひまつる。東洋半球、あまぎる雲霧。黃海萬里、ぢま
ける浪風。これより晴れて、けふより和ぎて。四百餘州、風おだやか

に。野末山おく、おしなべて。靡くや旗の、日の光。耀くけしきを、明日
こそは見め。（明治廿七年九月作）

新躰詩歌集 終

新體詩歌集跋

外山博士が、このふりの歌の讀口にておはすことは、はやう人々のゆるせるとにて、今さらにいふもおろかなるべし。阪のうし、中村のうしたち、はた此道の先達にて、よみたまへる歌ども、いづれも〳〵いうにめでたし。おのれは、これらの先生たちにくらぶれば、よはひの程のいたく劣れるはさるものにて、又かうやうのわざにたづさはれるは、昨日今日の事にしあれば、よみぶりのたどたどしきは、人よりもおのれぞまづよく知れる。さるに先生たちのおのれをすて給はで、此すりまきに、一二首をかしからむを、さしくはへねとろゝのかし給

へるなんげに後進誘掖のまめごゝろなるべき。

さはれおのれとて、我邦の歌のすがたにつきて、年ごろいさゝかかうがへ得たるふしなきにもあらず。うはこゝにものせるわが作をみるなはさむ人の、れのづから思ひ得たまはむにこそ。

うへだかずとし　志るす

明治廿八年九月廿一日印刷
明治廿八年九月廿五日發行

新體詩歌集

定價金參拾錢

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座一丁目二十二番地　大日本圖書株式會社
右代表者　專務取締役　佐久間貞一

版權所有

東京市京橋區銀座一丁目二十二番地　大日本圖書株式會社
大阪市東區博勞町四丁目十七番屋敷　同　支社
各府縣下賣捌所

東京帝國大學圖書館藏